

^13  
4307  
11



八13  
4307  
11

2  
250  
11



早稲田大學教育學部



2000-3417 15099

西史西史いろは文庫十一編序

世よ代す捨するる身みををももたたすすおおりり元元

ともとも花はなのの咲さひひももううここももたたすすれれおおりり

西さい上じやう人にんがが像ざうをを賛さん察さつすす例れい乃乃

解かいのの滑くわ純じゆん者者ももるるがが現げんをを志しのの咲さくく

生せいのの以いてて上じやう學がくのの形かたちをを以いてて通つうじじひひすす

たゞるんにもる程、遠机、對ふ  
日も眼を三芳望、山崎、身  
香程の滝と、香を首以、至  
うかき出、等、おお、ぬ、  
遠く浪花の書、辨、より、副、  
但志、さ、り、さ、ふ、お、お、  
難、波、津、も、ら、は、し

にも、い、ま、又、あ、し、も、ら、は、し、  
乾、く、現、く、あ、は、し、  
列、傳、を、編、も、久、く、  
底、あ、い、と、  
後、お、休、ふ

清め後十日

四月の花巻々  
ひ、ま、い、り、日

為永真水誌

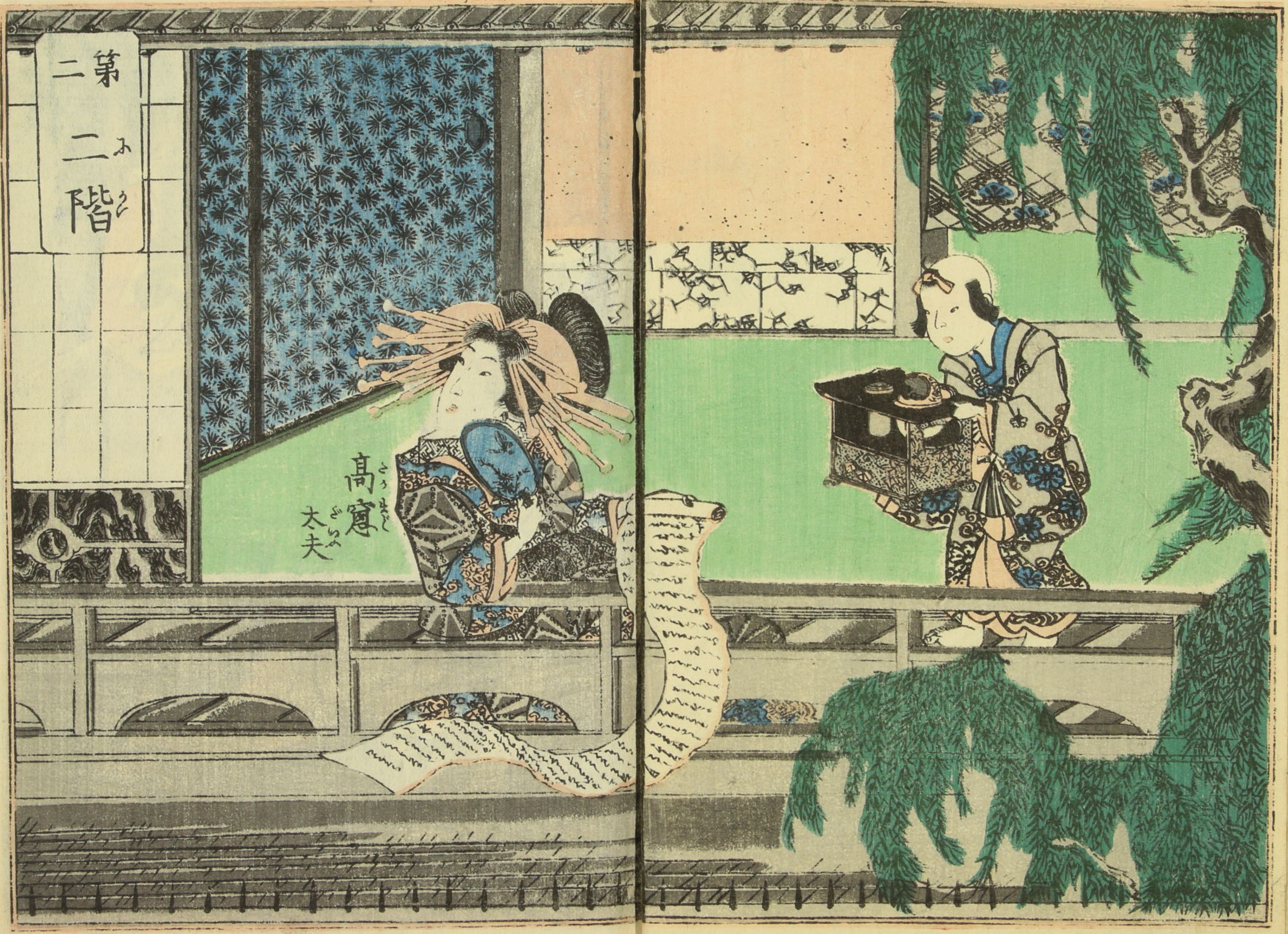
第一  
三階



大星由良之助

二第  
二ふ  
階かゝ

高たか  
窓まど  
太夫たゆう





三第  
堀外

侠客  
正目の下駄六  
實い善妻の同者

侠客  
明烏濡右工門  
大星の下奴  
實い  
吾妻の同者

江映いあは文庫卷之三十一

江戸 爲永春水著



第六十回

あはれいあは文庫卷之三十一  
 方燈の消て美の富二刀府ハ曲者かめつとやうう小突出  
 名もつらむを換小ちりひー程刀小操出せ程の只中せえ  
 本小代らまよそ曲者が獲さあぐらむさあろいん腰ろる一  
 扱よりちやく跳りかうつて次つららと富小由ささらめく



白及の光りふ丁とうけくろ手煉の連業かへま及ふ曲  
若の肩先ふりく吹つけさひ物喜ぶ孩さて中女のお松が  
猪手より雲洞に子お強歩る灯籠ふよりて二刀毎に今  
吹仲せり曲者が襟袷とて引起し冠に改巾を返  
まぶい曲老わ別人あふとて又かの物と悪あふぞ是いと  
ちり果してて辭申あつてうちあまは物と悪い子お推や  
及と違ふ技持つ苦く死息とホットつ死 有縁やあふけ  
あや今ぞ念願成就して老君のおん手おかりし女然び  
何うこそふ過んど言ふお遠方の母あく 一我が手おかぶ  
本屋一の 新ア初うをうりまじてい合息がまつりま  
まの基私を伴練のま字和島の廣中活沢物あまの  
が牌あて初名金珠と呼まはる父の先年水はあま  
まを許さぬのかん手おかりあへあは最新と遠方より  
義あつりくは惜さあは死存身い十六女母ふい幼き演  
小別は他お親族い何多祐と申身ひとりあて申父の御  
一大りありと怒んと主君お頼ひて服を乞ひうけ歌を

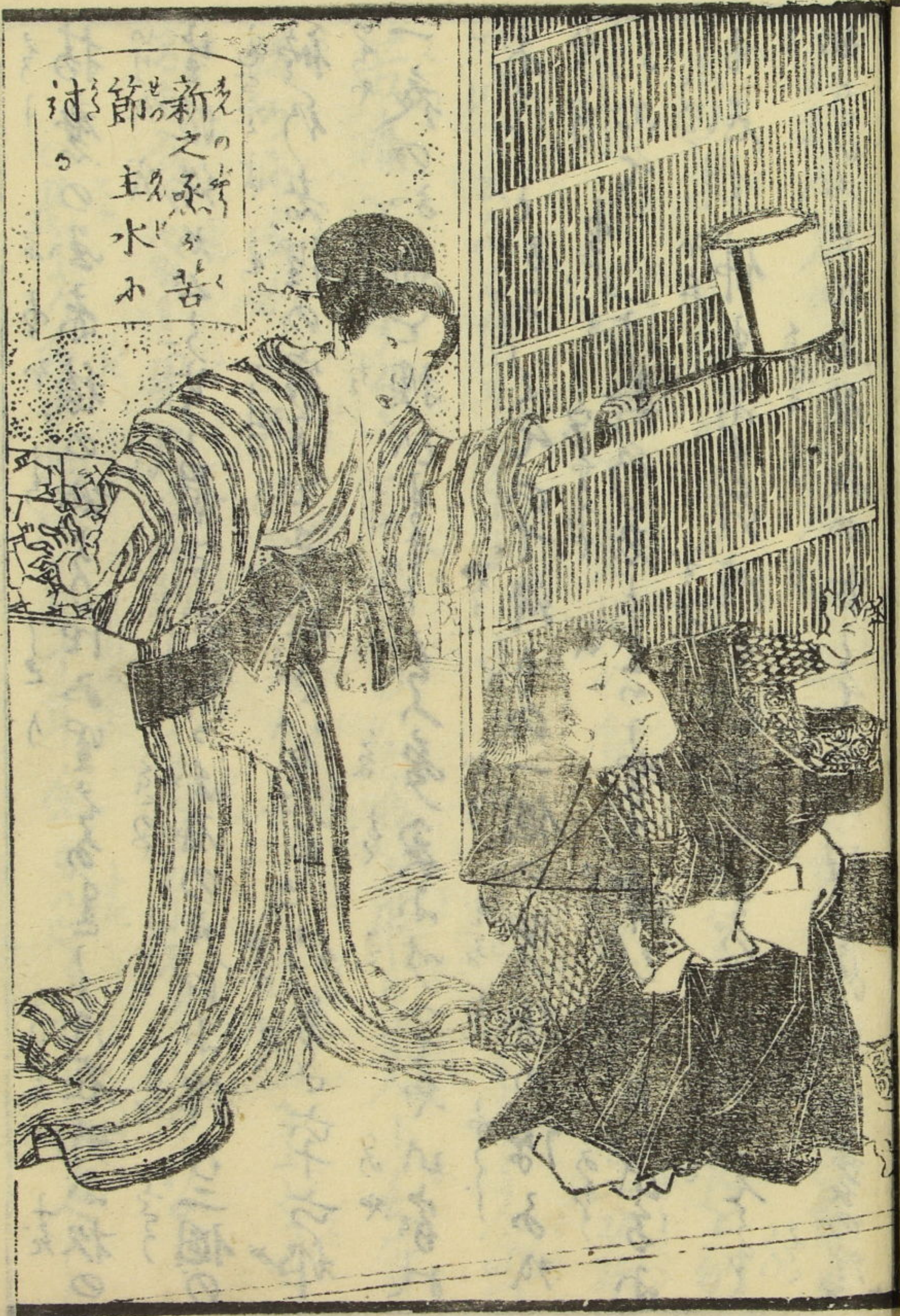


古田の家申あて牛尾田主水と吹しをぬ小進江の圃  
まて来て吹けがぬひげなく古田殿ふの家断張と吹  
こして吹の吹来ぬ知見はとあふふ忽地をこして吹ひ  
が去して止まきりあふ極はあふ方と尋ぬうち吹吹  
我名を知りまどと母方の性あまは袖を新と悲と愛  
せふ不家しと変うう棒木町あふかの深き小別漆  
より渠が伎倆ふ家せしめて命の爲まきとまうと許  
さぬのお情あてお救ひ下さるの事あふ永らくお家小止篇

らまて武術の指指南被りし御の御山勢がまぬお人あ  
山よりかどあふが我一命ふ換てありと申受ふ方此恩を  
報んと思ひ廻りしお最あまううは去月予の  
に付あのをあふるとき及古の中より牛尾田主水と  
吹の名あてえおしてお吹お問合おりくくとおめえ  
初つてお君の御ま生おぬは家の先生が尋ぬ子  
吹でありしと拍付決う高倉の作天候合備へ  
由命の君人今更ふ名若うけおおおおぬ君と名理

と云ふはとて現在の父と討まはしと云ふはとておめくとして  
あらん其父へ對して不孝あり孝を主とせば君も殺さ  
君とあり人を子の母と名給ふありぬ身のせらるるを  
見んと右つ左つ拘ふ名捕をめらるるせし命の君と生  
の君借ふまらるるえあはれ男と捐ふまらるる  
余はいしと虫残一切殺せんややくおあす命を落す  
あし一太刀ありと刃を交へおん男の身あて討まん  
あしおひあさるる由ゆゆ地お敵と呼子破おさるる  
深き事伴と名程我々命と物んとてあらくもあはれ  
あり下樹とてあまと思按と定め君び安ふりて  
つ不意お籠と名突入まし一人曲者ありと名つきて  
度の変お及びありト苦しむ息の十よりして一伍  
一竹とお籠まは二刀無き敵息して是ふんあけさ  
ん度款月志が身とありゆ通とある由過去の因縁  
それお籠ても作の父公治派氏を討とりし由箇指さ  
怒らして実お余候あり其度ありしおその親のうらとの

たま ち こと さま こと こと  
あらん 其 父 へ 對 して 不 孝 あり 孝 を 主 と せば 君 も 殺 さ  
君 と あり 人 を 子 の 母 と 名 給 ふ あり ぬ 身 の せ ら る る を  
見 ん と 右 つ 左 つ 拘 ふ 名 捕 を め ら る る せ し 命 の 君 と 生  
の 君 借 ふ ま ら る る え あ は れ 男 と 捐 ふ ま ら る る  
余 は い し と 虫 残 一 切 殺 せん や や く お あ す 命 を 落 す  
あ し 一 太 刀 あり と 刃 を 交 へ お ん 男 の 身 あ て 討 ま ん  
あ し お ひ あ さ る る 由 ゆ ゆ 地 お 敵 と 呼 子 破 お さ る る  
深 き 事 伴 と 名 程 我 々 命 と 物 ん と て あ ら く も あ は れ  
あり 下 樹 と て あ ま と 思 按 と 定 め 君 び 安 ふ り て  
つ 不 意 お 籠 と 名 突 入 ま し 一 人 曲 者 あり と 名 つ き て  
度 の 変 お 及 び あり ト 苦 し む 息 の 十 より して 一 伍  
一 竹 と お 籠 ま は 二 刀 無 き 敵 息 して 是 ふ ん あ け さ  
ん 度 款 月 志 が 身 と あり ゆ 通 と あり 由 過 去 の 因 縁  
それ お 籠 て も 作 の 父 公 治 派 氏 を 討 と り し 由 箇 指 さ  
怒 ら して 実 お 余 候 あり 其 度 あり し お そ の 親 の う ら と の

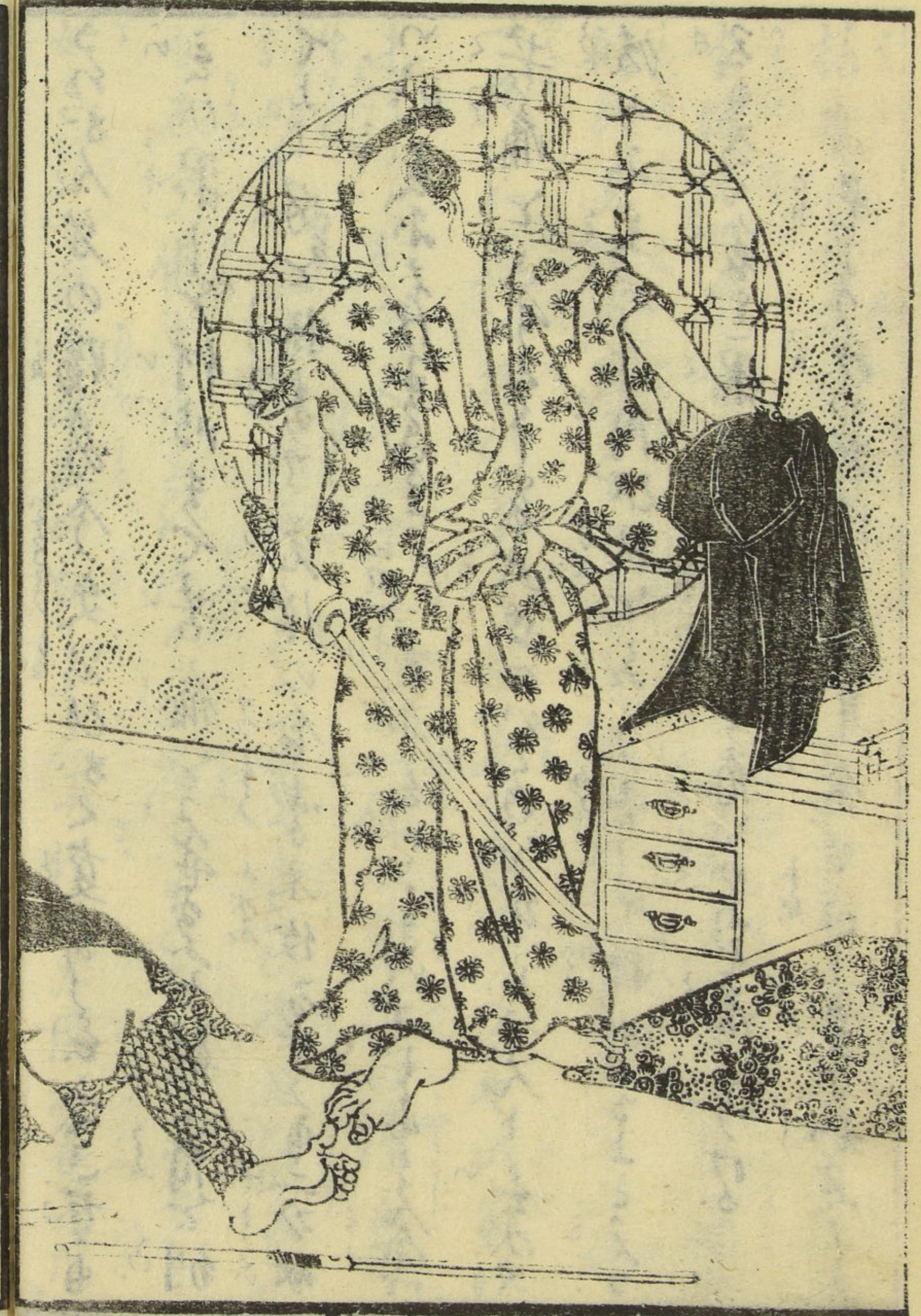


新之丞が苦節の水

子え可<sup>あま</sup>惜<sup>つら</sup>蒼<sup>あさ</sup>の<sup>あ</sup>若<sup>わか</sup>者と<sup>あ</sup>教<sup>おし</sup>す<sup>え</sup>の<sup>あ</sup>何<sup>なに</sup>の<sup>あ</sup>周<sup>しゅう</sup>果<sup>くわ</sup>ど<sup>あ</sup>や<sup>あ</sup>最<sup>さい</sup>あ  
 休<sup>やす</sup>の<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>美<sup>み</sup>の<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>ち<sup>あ</sup>不<sup>ふ</sup>従<sup>じゆ</sup>ひ<sup>あ</sup>名<sup>な</sup>人<sup>にん</sup>上<sup>じやう</sup>子<sup>し</sup>も<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>中<sup>ちゆう</sup>不<sup>ふ</sup>念<sup>ねん</sup>と<sup>あ</sup>討<sup>う</sup>  
 その<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>き<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>奈<sup>な</sup>何<sup>なに</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>や<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>尋<sup>たづ</sup>ね<sup>ね</sup>し<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>我<sup>われ</sup>不<sup>ふ</sup>用<sup>じゆう</sup>ふ<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>せん<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>  
 ふ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>ん<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>今<sup>いま</sup>も<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>で<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>あ</sup>ゆ<sup>あ</sup>つ<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>指<sup>さ</sup>さ<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>我<sup>われ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>  
 最<sup>さい</sup>悪<sup>あく</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>史<sup>し</sup>と<sup>あ</sup>查<sup>さ</sup>ら<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>疾<sup>しやく</sup>の<sup>あ</sup>負<sup>お</sup>せ<sup>あ</sup>ふ<sup>あ</sup>え<sup>あ</sup>や<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>復<sup>たが</sup>え<sup>あ</sup>  
 ま<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>ひ<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>け<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>眼<sup>め</sup>と<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>け<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>形<sup>かた</sup>と<sup>あ</sup>赤<sup>あか</sup>の<sup>あ</sup>首<sup>くび</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>け  
 送<sup>おく</sup>る<sup>あ</sup>先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>不<sup>ふ</sup>中<sup>ちゆう</sup>似<sup>に</sup>合<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>ぬ<sup>あ</sup>女<sup>め</sup>と<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>死<sup>し</sup>復<sup>たが</sup>と<sup>あ</sup>宣<sup>のたま</sup>ふ<sup>あ</sup>の  
 う<sup>あ</sup>子<sup>し</sup>我<sup>われ</sup>が<sup>あ</sup>以<sup>も</sup>今<sup>いま</sup>の<sup>あ</sup>色<sup>いろ</sup>と<sup>あ</sup>夜<sup>よ</sup>不<sup>ふ</sup>失<sup>し</sup>ふ<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>死<sup>し</sup>と<sup>あ</sup>今<sup>いま</sup>も<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>で<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>存<sup>ぞん</sup>命<sup>めい</sup>と<sup>あ</sup>

持磨の玉赤穂の城より此の里より一に在研お杖の  
生道結めぐる世最さあうあるお座の戸は不修む二個の  
修り若禮の宿子とさし取さ。お合申「仍多さ六十六部  
一夜のお宿と撰ひますすくま入夢お杖へてやい家れ  
お合しとおおくく六十六部りの一個の雙椀の障ふれ  
訂めく 王修り若とさし取さ。幸ひ今日いひお  
由志す佛のお是れはかお宿由まのうそつうつう  
如さいせれたお座夜の物してんお但せぬ因妙書の障  
ふらんおの賜あ今又おひかく復あうまふささ書由  
いひ果しと竹崎まて苦痛とるをせまふぞ敏く首を刎  
てより首を捨あつ覚悟の念常不使あさうの二刀故  
いひ一云おなげまらるる 二カ一カ 一云おまらるるがささおのうん余が  
苦痛とさすらうとめい世のいしをを取らせんとまひや  
後りふまかり再びおとぬりおして振かぬらよとらる  
るゆあく家果敢あや物とぬら育いおおぞ落さうける  
○是より次の物結い二十一年余由さし復と知るし

七夜と共不徳りゆすおんあや年々運家へ入る下り余  
 二個を執びて一我としても徳所の有るまは不自然な  
 厭ひまうさぬ余が世活不執りませう卜筮の水あて  
 是とぞ能借小一室へうち通ひまは主將の業を極ふ所  
 之に暖そし温菜とぬ人ふまづろ汲てまゝあるを奇  
 その間ふとあこの六瓶に足邊をまづくは色して一紙は  
 風流かお位指室ふか羨しうぞんどもすまふ能く  
 を以笑れを更を相ひますま那ふ二振の木刀を四葉



あさきまもまの叔もいま入あぬ奴居の丹煉とぞ下らむ  
昔田うしくあはまます苦しくまの性名とよ兼て  
つらごごあますと同まを主麻の額と松  
つても赤面いふまをまてまを我等の松下二刀松とま  
あて壮年の所かぬ武術がまをわねん田へ奴術の居ゆ  
ゆわくこまをまをまをまをまをまをまをまをまを  
子の世傳ゆづりく世の交りも面作史也後之を  
りの傳住居好の及田へ木刀の奴あはの伝不所持の奴せと  
久しくゆふゆあまままめが那木刀ふお目の付とをいれ  
いああえんごも只の心修好老といふをまをまをまを  
よりあかあかまをまをまをまをまをまをまをまを  
まを我等も赤面いふまをまをまをまをまをまをまを  
石と兼あつりあづい方の名あをまをまをまをまを  
ま我の字和尙の居中是あまのまをまをまをまをまを  
通和野入来と呼まをいさう知好ゆ其ひまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを

あさきまもまの叔もいま入あぬ奴居の丹煉とぞ下らむ  
昔田うしくあはまます苦しくまの性名とよ兼て  
つらごごあますと同まを主麻の額と松  
つても赤面いふまをまてまを我等の松下二刀松とま  
あて壮年の所かぬ武術がまをわねん田へ奴術の居ゆ  
ゆわくこまをまをまをまをまをまをまをまをまを  
子の世傳ゆづりく世の交りも面作史也後之を  
りの傳住居好の及田へ木刀の奴あはの伝不所持の奴せと  
久しくゆふゆあまままめが那木刀ふお目の付とをいれ  
いああえんごも只の心修好老といふをまをまをまを  
よりあかあかまをまをまをまをまをまをまをまを  
まを我等も赤面いふまをまをまをまをまをまをまを  
石と兼あつりあづい方の名あをまをまをまをまを  
ま我の字和尙の居中是あまのまをまをまをまをまを  
通和野入来と呼まをいさう知好ゆ其ひまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを

不徳玉と禮巡りまをさまで今不慮に由愧ひません終の  
 うらけと年をまへ只今でもあゝのさちを後悔致す  
 たり心ごもあまきまふ引替ひ人あど切衣名遠  
 七分遊くとやうお羨しい夏をどおます 二刀 刀理出せ  
 お二個の袖指あけ由武家お育つとお方と見え受ま  
 ちかお全しおふ何指は沢うぞんトませんが兎角時  
 節とお坊あさるうり休まぶさおまきまふい 余り  
 度でござおまは只今由是あ入平うまううとさるう

時節と袖と由二十年うくく成運小を果とりのと  
 ありまます一樹の蔭ふ余うえ休生の縁と兼ふ  
 つるふ一夜の宿をぬまはせたりお解とお物作を  
 致すしゆの深い縁でおさおませうお笑ひは  
 種あある度あぐるのう通和珩氏我にか別のう  
 とお主人お致しそ何指てあうう 八才一あり後進  
 由重とい愧りぬとあひ切つとううを吐ま由おん  
 別の穢悔さる我等ううお作魂まじしまをうト緒り

出せり方の又吐しへ次の田小具小流へ

第六十二回

依申守相島の海中小島の浪浪金鉢とて年十才  
ふありけり花由羞ききあ後振ふかの入平と名流の五  
ひ小島に悟しつゝ人の丈を尋ふ由云の世あつと夜ふ由死  
に流しふその流るおるへ男及流形のお柄おれが  
金鉢も二個が赤んあを悟るまのあど中入平小島  
と任まるといふ流小義理立び又雨流小走とていふ余

小流さる由へ以次とりて双方へ入りふ及びふ二個  
由吐流の穂意一旦心とみりるあを以候ふうち控  
かきとち武士の一名まごう余バ双方勝負を交し  
刃のうへあてあひと遂んと或月入平あ流が果し合  
とが倣んとせしと金鉢の吹くより候きてその場あへ  
強つけつ二個を控ふあどあうらうと盾あぬはあを  
は史候もてふあしめずか二個のおらうごう何れもあを  
と由まうささす世のバ柳乃あのせむけと由いへふ二



個ひと小こ八はち分ぶんととおお任にんせせままじじままるる也也へへおお互ごひひ小こ達たつ恨んをを是これ  
よりより二に個こ兄あに弟ていのの契せきりりとと借か小こ結むすびびとと云いふふをを是これ  
よりより三さん個こ兄あに弟ていのの契せきりりとと借か小こ結むすびびとと云いふふをを是これ  
よりより三さん個こ兄あに弟ていのの契せきりりとと借か小こ結むすびびとと云いふふをを是これ  
よりより三さん個こ兄あに弟ていのの契せきりりとと借か小こ結むすびびとと云いふふをを是これ  
よりより三さん個こ兄あに弟ていのの契せきりりとと借か小こ結むすびびとと云いふふをを是これ  
よりより三さん個こ兄あに弟ていのの契せきりりとと借か小こ結むすびびとと云いふふをを是これ  
よりより三さん個こ兄あに弟ていのの契せきりりとと借か小こ結むすびびとと云いふふをを是これ  
よりより三さん個こ兄あに弟ていのの契せきりりとと借か小こ結むすびびとと云いふふをを是これ  
よりより三さん個こ兄あに弟ていのの契せきりりとと借か小こ結むすびびとと云いふふをを是これ

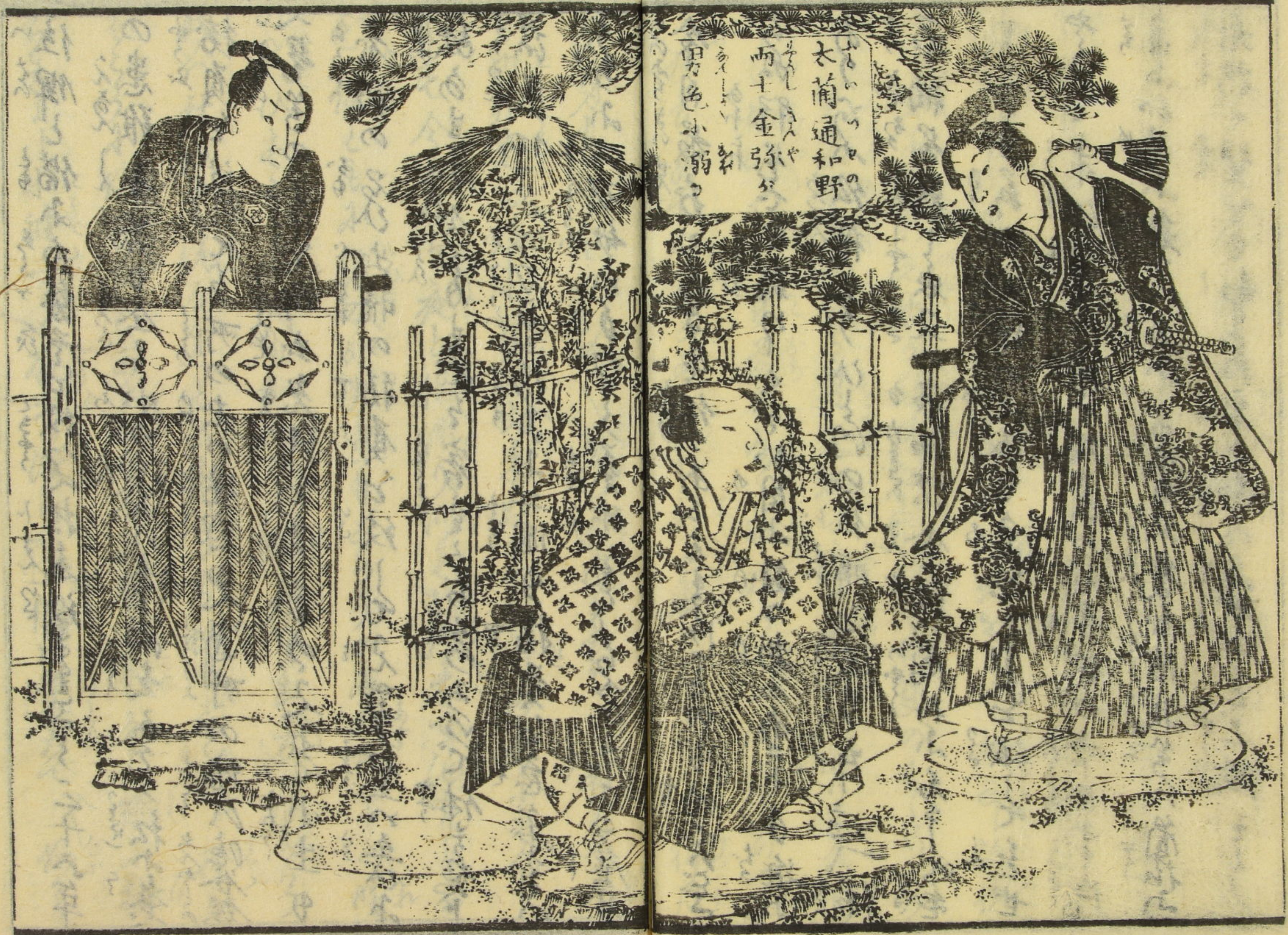
ううへへああままががああままのの小こ任にんせせばばううちち過としし小こ指さし金かね小こ結むすぶぶとといいふふ  
とといい果は合あをを做しんんととせせしし復また一ひと家か中ちゆうのの人ひととと申まをしてして知しるる  
ぬぬ者もの也なりああららほほろろ後のちがが命いのちふふららひひてて兄あに弟ていのの契せきりりとと結むすぶぶんんとと  
ままをを甘あまししめめがが今いま金かね小こ結むすぶぶがが必かならず死し小こ結むすぶぶにに余あま所ところ小こ結むすぶぶてて  
存ぞんずずららふふちち入い平へい也なり弟ていのの命いのちふふららひひてて兄あに弟ていのの契せきりりとと結むすぶぶんんとと  
士しをを知しりり実まことあるある者ものああららほほろろ後のちがが命いのちふふららひひてて兄あに弟ていのの契せきりりとと結むすぶぶんんとと  
渠みちがが力ちからああるるをを是これにに小こ流ながれれららしし命いのちがが惜おぼいいとといいふふのの中ちゆうにに小こ結むすぶぶ  
てて由よし以もつてて兄あに弟ていとと知しるるをを是これにに小こ流ながれれららしし命いのちがが惜おぼいいとといいふふのの中ちゆうにに小こ結むすぶぶ

隣おかし家申の老の悪は子晩二個の身小入る最  
は惜くあふあぞお人竊小お後と主君より男は  
唯と包徳金孫々流と慕ひて所く方とを徳巡り更  
脱ふ三十一年小及べど金孫の形赤い小小なる老更  
小款の手掛り更今小知とさる更の額さ入平島  
務あ人があひりぐ小物増とほりぐと笑ふ二刀研  
一四の縛さ一が丈兼重の老人更指完尔とうち笑ひ  
か一りめえ笑さあさのも男の又更のあふ家と推し

年月の心労余とそと察しらるる本よりお推しとさる  
その能く知とましとぞ一十二の款が知とさる  
その牛尾田主水と小別控者があ名あえ治法氏と手  
かうけさゆ初くまらるる二刀研一板と和殿が牛尾田り  
主水であるトあ人があひて用意の仕込杖と縁の  
辺り小引のけり舞と云々名増小破てからん坊ひに  
二刀研一イヤはあ人が急促あさるる許進の江存知  
あのとていあさうとあうさぬ小能と名若く杖の老が今更

迹の縁は由波さぬその今縁とまうま者の方の友の由ん  
おて指をを史の委くくお吐くまうまう角のうらむが  
昏さまが方煙とつけりまうまうま心の中を吞あうのうらと  
お吐くまうまのうらと云ひまうまのそ灯火ととりおるは伏  
えの里あて新之忠が縁をと救ひまの復のまめより  
渠の実名今縁あり復又かの者が最後のありまる箇  
指く如いとと復あまの物指りニカハ周縁とのふ物  
と妙かめて今日がまあのも新之忠が二十三年の祥月

今日最おらうまて仏があるともうしとの由他ふいご  
らぬ縁は由波さぬその今縁とまうま者の方の友の由ん  
ありあふ仏檀よりひし門の位牌と取り出ニカハ信  
名袖は新之忠又の名治深今縁。道橋ふあうてを  
まうまの由縁の人も由縁のまうまを海してをせ  
やうと年以るまて指と処さるひ今日の命日ふを許  
まうまの月ふ敷るまふらそ由大慶に指我まの箇橋ふ  
老拙て壁と由新之忠の命は友所ふを上げ候とらう



大南通和野  
両十金弥が  
男色小溺り

位牌いはいと借かふ白しろ髪かみをを放はなつて持もち来きて致いたさすは二十六年  
の患うれ難なん辛しん苦くの全ぜんく水みづの泡あわのあぬ去いるあぞう松しょう小せう急きふ  
務む負ふと交まじりてり所ところの老おいの迷め惑まど也なり而し所ところの地ち以も陸りく谷や殿でん  
へ是こ等らのよと祈いのち也なり免めん許きょと受うけとる又またあて小せう生せいの  
老らう和わの及および如ごと晴はの務む負ふと絞しぼして見えやう聖せいの互たがひひふ  
款かあまはと今いま宵よまてを密ひそまらうちらうのて休やすまれ下くだ  
落おち切きつて二ふた刀や切ぎが指さふふ二ふた個こ中ちゆう務む負ふを急きふがまふ  
うちふ二ふた刀や切ぎのつづる乗ちゆう勝しやうとらうたを密ひそまらう薦せんめ

その方かた由よしまらうておのく著ちやくを納おさめりあぞ 一ひと枚まいを及およぶ  
由よし此こ能のう走そうと致いたさす夜よの出来できぬのてお氣きの毒どくふと下くだ  
すま今いま宵よを夜よと侶りよ活かつりぬまお納おさめれ泊とち中ちゆううた  
お二ふた個こと由よし小せう娘ぢやうのの傍かた也なり由よしあらうのふゆ月つきのしと晴は  
の秋あきひまらうのの間ま由よし互たがひひ休やす息いきりまらう若わか官くわんらう  
時ときの秋あきの中ちゆう流りゆうの是ことひあうちを故ゆゆまらうの松しょうち  
そらう小せう何なにありとあるあてるふ合あ合あ世せ是ことと能のう小せう掛か  
らまらうト小せう能のう二ふたを取とり出だし渡わたりまを二ふた個この受うけな入いる何なに

何事でもおんづな事ふぞん下りては候も、  
つと者か、  
と終り、ひとり所不麻記も、  
復心ごぞおしせう、  
あふおあがごを、  
名者、  
世ぞ、  
と合ふ及ぶ、

つと者の裡、  
名者、  
とみち、  
らまて、

一しうど何しやうん小掛りて眠るんとまきと森へれば  
 二個の長き秋の夜とせんりともせむ後小松の鳥  
 の名波の比二刀秋の服とせし秋の夜とあつた  
 友人小若とともせむの友由後とらるて叔二個  
 連さち村長方へ秋さつ秋討の仔細とて園にこと  
 物流り双方より物書とくたあまあ出さつて村長  
 の後さしからち控おくさあなう後が二個と我が小止  
 めて百姓しゆ小うちちせむせむ赤梅の松小紐つけり  
 として新山小松管敷吹しめさるる送の場くしよに雲河あり  
 下つてこの松系あつてあ速もちつけよとありて別検校  
 の役人小若と人教ときあさるるその妙は勿地  
 方小松へ是とせんて遠近より是集つて相ひさあ  
 してあまもせん小最暗がきりさあなりけり今又村長  
 の是等のよと立取りかの二個小松あて双方小  
 松びて又村長小付りて下つてこの松系小松  
 へ刻つて小入平由小若由共小松十の松と起て

あま

さき

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

ちや仕年まゝねあゝあゝ福ふちい由ゆ二刀ふたは毎まゝが老お朽くて腰こし由ゆ斜しや小こ  
 ねさう小こ鏡かがみ其その後のち仕しあさふ二十ふたじゅう余年ねんの本ほん屋やを遂つひる  
 いまの  
 今いま以もつとと死しふありと心こころの勇ゆう氣きはは從したがひ郡ぐん老らう氏し  
 御ご是こゝろとと大おほ丈さ丈さの膽いそありと由ゆ丈さの知し是こゝろるる殿との御ご  
 以もつと人ひとうと引ひつゝん小こ何なに後のちの丈さありとと初はじめめののち  
 小ことて兼かねて用もち意いの衣い被ひ丈さ小こ袋ふくろの裡うち小こおさめりりを  
 小こ判はんんん身み小こままとといい若わかくくとと比ひおお拾ひろひひ辺へととちちららふ  
 て立た出でままのの丈さ引ひ智ち二ふた刀は毎まゝち余あまのの身み形かたち由ゆ取と鏡かがみ  
 ののどど僅わずか小こ丈さ小こ二ふた振はの本ほん刀やちうををりりにに接つふふとと之これ三さん個こ舟ふね  
 及およびび檢けん使し小こ辨べんひ名なととああのの若わか氣きとと演まわてて脱ぬふふ揚あ負う余あま  
 及およびびとと是こゝろもも檢けん使しととああめめ許ゆる多たのの見みおお皆みなもも小こ行ゆ  
 をを握にぎりりつつ首くびとと伸のべべととああめめああるる以もつと短たんいいままとと長ながけけととど  
 由ゆ紙かみ員いん多た小こ限かぎりりああららばば其その主しゆ令れいのの紙かみききのの中なのの卷まの  
 ちちりりめめ小こ鏡かがみべべ

正史  
 實傳いはは文庫卷之三十一



証<sup>ま</sup>録<sup>り</sup>  
實傳

いはは文庫卷之三十二

江戸

為永春水著

第六十三画

徳<sup>とく</sup>の所<sup>ところ</sup>へ見<sup>けん</sup>おの<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>を左<sup>さ</sup>右<sup>みぎ</sup>お<sup>の</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>て二<sup>ふた</sup>八<sup>はち</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>一<sup>ひと</sup>個<sup>こ</sup>の<sup>ところ</sup>處<sup>ところ</sup>に  
 が矢<sup>や</sup>末<sup>すえ</sup>の<sup>ところ</sup>裡<sup>うち</sup>に<sup>ち</sup>走<sup>はし</sup>り<sup>り</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>發<sup>はつ</sup>音<sup>おん</sup>の<sup>ところ</sup>武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>お<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>對<sup>たい</sup>ひ<sup>ひ</sup>て  
 松<sup>まつ</sup>の<sup>ところ</sup>二<sup>ふた</sup>刀<sup>たう</sup>の<sup>ところ</sup>女<sup>によ</sup>兒<sup>ご</sup>で<sup>で</sup>ご<sup>ご</sup>ざ<sup>ざ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>一<sup>ひと</sup>個<sup>こ</sup>の<sup>ところ</sup>處<sup>ところ</sup>に  
 糸<sup>いと</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>飛<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>今<sup>け</sup>朝<sup>あさ</sup>あ<sup>あ</sup>ち<sup>ち</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>帰<sup>か</sup>り<sup>り</sup>及<sup>およ</sup>び<sup>び</sup>け<sup>け</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>て  
 ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>宙<sup>ちゆう</sup>を<sup>を</sup>飛<sup>と</sup>び<sup>び</sup>て<sup>て</sup>強<sup>きやう</sup>付<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>に<sup>に</sup>二<sup>ふた</sup>個<sup>こ</sup>の<sup>ところ</sup>處<sup>ところ</sup>に

まきさる血刃の壯の人達 私の親の心鏡の通りを承く致し  
て居りまはせまはせむ 務負の後がん元あふまはせむ及むぬ  
まはせむ 私が御太刀を致し 今まはせむまはせむ何卒か  
うへへまはせむまはせむ何分お預ひまはせむまはせむ  
頼むあぞ 誓ふの役人ともて 果の行くぬ 處女共  
けかげあふまはせむ 誓ひまはせむ 誓ひまはせむ 御太刀とまはせむ  
あふまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ  
らひ 難きあふまはせむ 二刀御太刀とまはせむ 渠が所存と承ひまはせむ

あふまはせむ 時よふらびお手の老人の我くしう中使す  
まはせむ あふまはせむ 鏡さうり二刀御太刀とまはせむ 誓ひまはせむ  
まはせむ 二刀 御太刀とまはせむ 女児がよりあふまはせむ 誓ひまはせむ  
別後 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ  
かあふまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ  
方が何れ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ  
まはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ  
老さらまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ 御太刀とまはせむ

仇おの互ひ小恨とのみけはと申あのお二個が養の家  
とて三十五年の心算と云ふ事ゆゑの毒更更の交ふ  
の及び一ある素り勝負の勝の運討らるるゆゑ命救  
あるまはれぬひ交ふて討つともいさう苦しからねとも  
勝負不勝と女児とい物大刀おせりとあつてい未代まで  
の名の穢はその養ふおつていかあひごうとあつた更お  
死と採まるとおつて見お為て居やま下比りつけれ今  
更お又返すこと云葉ゆゑくはるも福とまどくと養家の

人の後ろお扣へ勝負いうふことえつらわの心のうちおそ神  
と念ふ方の外作身ゆゑのとき許多の見おがふぬ  
世絶あるあどはく三つ今日の款討い爺えをのりて成  
とも及刻がねくと思ふ処へおつる新様か紐付て来こ  
ううらうのい面白と思つたら爺えが叱つてお返し  
仕舞ふ那新様とるうい身ゆゑ下勝負やううらう  
見え見えと遠へお入るふあのお爺えも余秘吸れ  
死にと見えへるせ何卒親仁見えぬうお頼んまうしやま

後五ごの形かたち様さまが付つて居ゐり申まをすヨう新あらたうく女め見みが来きる  
てんんく小こ爺ぢさんの肩かたをかかへうちぢぢおおりいハハ王おう然ぜんて日  
わわんんがの木き下しためめううのの這は方かた小こ指さし二に個このの形かたち良よハハ氣き小こうう  
後のちとと名なづづてて居ゐるらヨう一いち爺ぢさんの方かたがが負おかかとと後のち  
ハハおおわわつつがが引ひ取とつつてて世よ作さとと為なりりててききららアア引ひ取とるる小  
指さし居ゐるら小こ指さしももおお入い癖くせ小こささるる娘むすめとと連つりりてておお方かたのの所ところのの二に階かい  
小こ指さしいいりりああんんままりり氣きがが利きめめ一いち五ご十じ五ごヨうそそののとととと  
小こ指さしアア何なに処どこぞぞ小こ氣き氣き音ね内うちをを入いれれ付つてて那あの様さま小こ爺ぢさんの世よ  
てて申まをすらんん見みねね多おほ利り潤じゆんでで申まをすら懐なつかききとと為なりりてて喰くつつ  
てて居ゐららままととやや申まをすら可まおお爺ぢ方かたののははままららわわるる取とれれ就すなはちち苦く苦く等どうとと  
ままるるおお爺ぢアアおお入いりり。ソソううくくおお入いりり揚やう屋ふがが木き下したままるるそそううとと空くうをを  
ととりりののてて居ゐるら後のちとと宜よろしくく見みねねととままるるおお入いりりハハヤヤ一いち五ご十じ五ご後のち就すなはちち  
ううととままるるヲヲヤヤくく爺ぢさんが表あ中ちゆうへへ出で掛かととままるるくく那あの一いちとと  
んんとと威い勢せいがが宜よろしくく見みねねアアおおののくく交あ束くわ小こ分ぶんととああせせてて  
後のち目めもも振ふららむむそそうう後のち小こ矢や束くわのの裡うちにに那あの三さん個こががいいてて  
るるくく捨す使し小こ爺ぢ一いちとと場ば合あををままるる双そう方ほう不ふ差さ別べつははととてて

まのとりえて 遺へり小松下二刀研その花袋ハ半尾田水  
和後元年水口の松原にて治次傳のを討つ  
又讐言を報はんより息令孫が出ほせし我と友人  
我のよふ不令孫不物太刀致えとて三十日六年がその  
乃所く方くを尋ねぬとて交ふ行来由知是ごりし  
いへるへ平結をほのて 猶つ不所夜をわくむの和後  
のけりり 急こと治次親み二個まで余候のた伏せ  
討つ 執き素より我と友人の互ひ不恨ふあはれ

ど由候ふよつて致を所い又捨がた更あはる事の後  
あひ及びし不見受しとて帯刀不長短を用ひられ  
は本刀をりてたをさぬしおもふ思はぬと致を  
悔らしとてあはるおもふ本刀を捨とせおとす  
長短あて互討ひていりや和後を討つるに由候  
が不意ふあはる戲且更あはらざるをいご美短  
と所おせらとよとりふ二刀舟らち笑てそのお辯  
長短あはれと某年以辺不意て久あはる討



木刀のあはれが廿あての一羽の思ひで小い木刀を晴にさ  
勝負を倣んとぞんぜり更態し是をが勢へ一が木刀  
ありしを某が拳のうらふ覺へあはれがその切味のかう  
くふ其致ふ由やい芳つべきさらが某二刀をのりてお  
おふふあるはる某が和後等兩人左右より一交ふ討つてお  
らまよしと云ふより速く二刀抜い撥ある二本の木  
刀と両方おさつて侍かすはは這方の二個へお怒  
り勝さ藤が多まうか余あうあ人が一交ふ討つて

かすてらいよくりて卑怯お似しう我より蕞らん否  
我らと互ひお先をいどと一が終おお強争ひ勝さ  
余が目おおつんせを某んと尋人の一刀抜かぎ吹てか  
まが二刀抜い右左お取らる木刀あて受つるがうら  
致ふなどお丈の初進らる疲奔只ひと討とお強が  
悔つらあは直かり神復不名致の木刀角おお立  
らまよあうくお吹おむ遠のあはれを受た刀おふのこ  
おあまよいと申お花く見四らあぞ堪りらふら入年が

そ外<sup>まへ</sup>岐<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>厭<sup>いと</sup>わとそ有<sup>う</sup>兵<sup>へい</sup>と由<sup>よし</sup>言<sup>い</sup>の<sup>こと</sup>左<sup>ひだり</sup>りより討<sup>う</sup>て  
か<sup>か</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>由<sup>よし</sup>せ<sup>せ</sup>ど<sup>ど</sup>左<sup>ひだり</sup>手<sup>て</sup>お<sup>お</sup>持<sup>もち</sup>し<sup>し</sup>木<sup>き</sup>刀<sup>とう</sup>あ<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>是<sup>こゝ</sup>由<sup>よし</sup>お<sup>お</sup>返<sup>かへ</sup>す  
さ<sup>さ</sup>、<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>び<sup>び</sup>以<sup>も</sup>刀<sup>とう</sup>お<sup>お</sup>務<sup>む</sup>の<sup>こと</sup>僕<sup>わが</sup>力<sup>ちから</sup>を<sup>を</sup>濁<sup>にご</sup>し<sup>し</sup>り<sup>り</sup>けん  
及<sup>い</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>双<sup>そう</sup>方<sup>ほう</sup>より<sup>より</sup>透<sup>す</sup>由<sup>よし</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>せ<sup>せ</sup>ど<sup>ど</sup>討<sup>う</sup>て<sup>て</sup>む<sup>む</sup>た<sup>た</sup>刀<sup>とう</sup>風<sup>ふう</sup>  
づ<sup>づ</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>孫<sup>まご</sup>と<sup>と</sup>由<sup>よし</sup>二<sup>ふた</sup>刀<sup>とう</sup>敵<sup>てき</sup>の<sup>こと</sup>以<sup>も</sup>年<sup>とし</sup>以<sup>も</sup>辨<sup>わ</sup>お<sup>お</sup>練<sup>れん</sup>し  
義<sup>ぎ</sup>、<sup>ま</sup>緒<sup>つづ</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>び<sup>び</sup>及<sup>およ</sup>の<sup>こと</sup>中<sup>なかつ</sup>お<sup>お</sup>在<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>の<sup>こと</sup>い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>初<sup>はつ</sup>む<sup>む</sup>る<sup>る</sup>氣<sup>き</sup>  
及<sup>およ</sup>も<sup>も</sup>る<sup>る</sup>く<sup>く</sup>右<sup>みぎ</sup>お<sup>お</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>左<sup>ひだり</sup>り<sup>り</sup>お<sup>お</sup>拂<sup>はら</sup>ふ<sup>ふ</sup>飛<sup>と</sup>鳥<sup>ちう</sup>の<sup>こと</sup>如<sup>ごと</sup>と<sup>と</sup>と  
ら<sup>ら</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>血<sup>ち</sup>氣<sup>き</sup>壯<sup>さう</sup>の<sup>こと</sup>為<sup>な</sup>者<sup>もの</sup>お<sup>お</sup>由<sup>よし</sup>方<sup>ほう</sup>づ<sup>づ</sup>べ<sup>べ</sup>く<sup>く</sup>の<sup>こと</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>人<sup>ひと</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>ぞ

お<sup>お</sup>務<sup>む</sup>の<sup>こと</sup>入<sup>い</sup>平<sup>へい</sup>の<sup>こと</sup>心<sup>こゝろ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ど<sup>ど</sup>と<sup>と</sup>由<sup>よし</sup>無<sup>む</sup>身<sup>み</sup>行<sup>ぎやう</sup>と<sup>と</sup>波<sup>なみ</sup>流<sup>りゅう</sup>と<sup>と</sup>  
ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>志<sup>し</sup>ど<sup>ど</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>蹴<sup>く</sup>ひ<sup>ひ</sup>勞<sup>らう</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>お<sup>お</sup>た<sup>た</sup>刀<sup>とう</sup>お<sup>お</sup>ど<sup>ど</sup>ら<sup>ら</sup>お<sup>お</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>  
二<sup>ふた</sup>刀<sup>とう</sup>敵<sup>てき</sup>の<sup>こと</sup>心<sup>こゝろ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ど<sup>ど</sup>と<sup>と</sup>由<sup>よし</sup>渠<sup>ち</sup>等<sup>とう</sup>が<sup>が</sup>年<sup>とし</sup>の<sup>こと</sup>裡<sup>うち</sup>只<sup>ただ</sup>一<sup>ひとつ</sup>お  
ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>克<sup>かつ</sup>難<sup>なん</sup>く<sup>く</sup>の<sup>こと</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>所<sup>ところ</sup>為<sup>な</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>三<sup>さん</sup>十<sup>じゅう</sup>六<sup>ろく</sup>年<sup>ねん</sup>の<sup>こと</sup>年<sup>とし</sup>月<sup>げつ</sup>  
と<sup>と</sup>尋<sup>たず</sup>ね<sup>ね</sup>り<sup>り</sup>ど<sup>ど</sup>う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>艱<sup>えん</sup>難<sup>なん</sup>辛<sup>しん</sup>苦<sup>く</sup>と<sup>と</sup>仇<sup>あだ</sup>お<sup>お</sup>さ<sup>さ</sup>せん<sup>ん</sup>の<sup>こと</sup>本<sup>ほん</sup>意<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ん  
お<sup>お</sup>ば<sup>ば</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>渠<sup>ち</sup>等<sup>とう</sup>が<sup>が</sup>所<sup>ところ</sup>の<sup>こと</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>の<sup>こと</sup>い<sup>い</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>金<sup>かね</sup>銀<sup>ぎん</sup>が<sup>が</sup>及<sup>およ</sup>  
番<sup>ばん</sup>小<sup>せう</sup>迷<sup>まい</sup>ひ<sup>ひ</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>隱<sup>いん</sup>慙<sup>ぜん</sup>より<sup>より</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>復<sup>また</sup>お<sup>お</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>こと</sup>批<sup>ひ</sup>判<sup>はん</sup>の<sup>こと</sup>し<sup>し</sup>  
ろ<sup>ろ</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>物<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>刀<sup>とう</sup>を<sup>を</sup>え<sup>え</sup>と<sup>と</sup>出<sup>で</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>初<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>白<sup>はく</sup>鹿<sup>ろく</sup>



老<sup>め</sup>老<sup>か</sup>老<sup>か</sup>さうまひー冷<sup>い</sup>ありとて求<sup>もと</sup>めて失<sup>う</sup>ふべきふありぞ  
老<sup>め</sup>老<sup>か</sup>老<sup>か</sup>は秘<sup>ひ</sup>不<sup>ふ</sup>疑<sup>ぎ</sup>ふとまじが定<sup>さだ</sup>めて渠<sup>を</sup>心<sup>こ</sup>ふ及<sup>およ</sup>びごと  
と支<sup>し</sup>と知りて俱<sup>く</sup>不<sup>ふ</sup>覚<sup>かく</sup>悟<sup>ご</sup>由<sup>ゆ</sup>究<sup>きう</sup>めほらんと奈<sup>な</sup>がは世<sup>よ</sup>れ  
いとまを取<sup>と</sup>ら世<sup>よ</sup>迷<sup>ま</sup>ひの爰<sup>ゑ</sup>と覚<sup>さ</sup>を異<sup>い</sup>人と右<sup>みぎ</sup>よりそ  
ね急<sup>いそ</sup>務<sup>む</sup>が破<sup>やぶ</sup>地<sup>ぢ</sup>い又<sup>また</sup>を引<sup>ひ</sup>らぐー丁<sup>てう</sup>と亦<sup>また</sup>さる木<sup>き</sup>刀<sup>とう</sup>の  
手<sup>て</sup>練<sup>れん</sup>の糸<sup>いと</sup>の裡<sup>うち</sup>あやまらば水<sup>みづ</sup>由<sup>よし</sup>らまらば不<sup>ふ</sup>疑<sup>ぎ</sup>が  
首<sup>くび</sup>の遠<sup>とほ</sup>不<sup>ふ</sup>飛<sup>と</sup>散<sup>さん</sup>つらり是<sup>こゝ</sup>あぞ獲<sup>と</sup>く入<sup>い</sup>年<sup>ねん</sup>が怯<sup>おそ</sup>むと得<sup>え</sup>  
らりと附<sup>つ</sup>入<sup>い</sup>て左<sup>ひだり</sup>紐<sup>ひも</sup>不<sup>ふ</sup>掛<sup>か</sup>ひー拳<sup>こぶし</sup>のさへ不<sup>ふ</sup>疑<sup>ぎ</sup>のほひと

亦<sup>また</sup>さるまじ二<sup>ふた</sup>つふありて七<sup>なな</sup>例<sup>れい</sup>まけりありさま不<sup>ふ</sup>群<sup>ぐん</sup>集<sup>じつ</sup>の  
兄<sup>あに</sup>あをさうやあつらりと養<sup>やしな</sup>つ爰<sup>ゑ</sup>あがりり唱<sup>な</sup>りり止<sup>と</sup>ざら  
後<sup>のち</sup>不<sup>ふ</sup>疑<sup>ぎ</sup>の学<sup>がく</sup>人<sup>にん</sup>ぞ近<sup>ちか</sup>しく天<sup>あま</sup>と相<sup>あ</sup>ひ地<sup>ち</sup>と相<sup>あ</sup>ひ收<sup>と</sup>びいさ  
ひぞ不<sup>ふ</sup>疑<sup>ぎ</sup>あり

徳<sup>とく</sup>て捨<sup>す</sup>彼<sup>か</sup>の侍<sup>さむらい</sup>の赤<sup>あか</sup>徳<sup>とく</sup>の依<sup>よ</sup>る互<sup>たがひ</sup>帰<sup>かへ</sup>り以<sup>もつ</sup>肯<sup>けん</sup>委<sup>い</sup>ふ言<sup>げん</sup>  
上<sup>かみ</sup>あるまじと流<sup>なが</sup>谷<sup>や</sup>後<sup>のち</sup>岐<sup>まが</sup>りめまじと名<sup>な</sup>他<sup>た</sup>の切<sup>き</sup>おふ  
て由<sup>よし</sup>の裡<sup>うち</sup>まがらと老<sup>らう</sup>あり福<sup>ふく</sup>を余<sup>あま</sup>秘<sup>ひ</sup>ふら  
破<sup>やぶ</sup>まじらるを況<sup>あは</sup>れ木<sup>き</sup>刀<sup>とう</sup>あて人<sup>ひと</sup>まじり初<sup>はつ</sup>のどくふ

言ふを老人を常人の如く月をりまう  
付よとあるを懐て二刀抜き心おふ呂され  
の之の更何ゆかゆあううさるおまうしあられ  
金が富家お呂抱んとあるを二刀抜き舞  
只老赤とのを懐て掛らぬ和徐小娘の化  
男ふあややと名ねさういふゆ一個の片木  
して名を又と懸と唱えう富所叙乃神行  
のとあ都おをありとまう世介は久の又  
と懸を抱ゆへいとて子速船より呂呼と神知  
百石と名りしおは又之懸ゆ又おとらぬ智雲  
そがまし老お自お進くお登用せらまて言白  
五十石お及びし以治谷お滅乞の為さかろ余  
あや討入の夜ゆ二刀をりつて故とあやませ此  
懸あねをさうたせゆ又二刀存より授け言  
家傳の妙言と誦しゆ久なるましを終以外お  
又之懸の久あは種々の略談あまどゆ牛尾

田のよみ傳つての肴皮續俵あらんろと次回ハ  
物語化事お及ぶ

辞世

このぬの皮とをありをひとと下ハ 牛尾田  
思ひとらぬろ 死出は談話ナ 高教

折ら見物つら後周小紀を這一首おてゆらるるの  
らつらとくし人をおんるの心地を

第六十四回

八百屋 大東を某之を某の仕出の宜あつたともやのこる

由人が賣れくはより一個の仲男 子ハ八百屋さん

ちう門と持た人 子ハ冬菜をありふありやと社也

さうまけて番やせう 子ハ三えんおちを今後人がけ身

か且物がおお小何さ遠く人と言つて那方の茶店

お清つてござるうら一寸来て呉るせ人 子ハ「支那やア

茶を喫つてくやさるの老やアござりやねんろ 子ハ「何故

さうおらぬが速く果るせ人ト列立らして不性な

おね小住さり 子ハ「おね小の仲男の茶店ふらり門お

八百屋と侍とせむて主人小憇と暮しとおがしく再び  
其処へ立出来たり 仲「是れを奥の箱裏ふとぎゆく  
後へ咄へと言ひのうら草鞋と挽やわぐんをせ下  
言の是て八百屋を合衆のう格どむとの言ひもど  
是と洗つてま候奥の一下もふりてはむぐみ十餘りの衣  
士が這廻つてト咄び入るはあぐに垣見也しく小聲めん  
物と洗つて拍く返事ふさう候の四もふぞ 物「イヤッ其振の  
怖りより此身が考極の扮打を足て免か小怖り為  
うおまゝあんごか途中やおと言ひひりてを供れ  
男の咳あやめあるとあつとさうう以茶店へ咄び入  
て来ぬ外小用事を言付て先一降るさうさ  
物由達を度か度へあひが何れもして由考極の姿のう  
小浪人の所業ふせまう虎形うち括とさうと云ん  
史が徳谷の家来美村寄物と云何極の思  
いまあひ 先中「イヤッ宛り左内さぬま極お目小憇う

八百屋と侍とせむて主人小憇と暮しとおがしく再び  
其処へ立出来たり 仲「是れを奥の箱裏ふとぎゆく  
後へ咄へと言ひのうら草鞋と挽やわぐんをせ下  
言の是て八百屋を合衆のう格どむとの言ひもど  
是と洗つてま候奥の一下もふりてはむぐみ十餘りの衣  
士が這廻つてト咄び入るはあぐに垣見也しく小聲めん  
物と洗つて拍く返事ふさう候の四もふぞ 物「イヤッ其振の  
怖りより此身が考極の扮打を足て免か小怖り為  
うおまゝあんごか途中やおと言ひひりてを供れ  
男の咳あやめあるとあつとさうう以茶店へ咄び入  
て来ぬ外小用事を言付て先一降るさうさ  
物由達を度か度へあひが何れもして由考極の姿のう  
小浪人の所業ふせまう虎形うち括とさうと云ん  
史が徳谷の家来美村寄物と云何極の思  
いまあひ 先中「イヤッ宛り左内さぬま極お目小憇う

まきのゆ あら 実不 めん 面目 たい 次第 ゆ の ま 変 て ども あ ま か ず に 松 の

ま 尚所 へ 中 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り

あ ろ う 皇 取 を 致 し て 予 の 命 を 危 し たら し ぬ と ぞん と 舟 へ 上 り

大 願 を 致 し て 予 の 命 を 危 し たら し ぬ と ぞん と 舟 へ 上 り

是 ま ち に 以 ち 舟 を 斃 せ ば 予 の 命 危 し たら し ぬ と ぞん と 舟 へ 上 り

舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り

舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り

舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り

舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り

舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り

舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り

舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り

舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り

舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り

舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り

舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り 舟 へ 上 り



より謙倉へ来り自取の口を尋ねて預けおまへ妻  
を志すべくお頼ごまうとあらぬ素り以て身が  
娘のまじりたる変り不細事な後夜書へ下ら  
て給指でも持さうと申すおありとら不迷おれ  
あへ我等より送りせしめんと由娘を巻へ  
まうとらと望くお約束を致しこととら後  
何の事候申すく我等夫婦が案じりより別  
眼の部を撰て指さうと申すおありの事

我等の意不致智を致して謙倉持身をまじりけ  
らまとうと望くお約束お後不迷おれ  
う変と家内のおを頼らば引連せ高所へ  
来りお頼て先達と娘不迷人て預け巻れと  
後の家候は奥由我等が荷物とらおあり  
叔澤余人悪くともの人を頼ごまうとら  
歩行くお後の新米を尋ね人由一向在家  
知まおんさうら大きお心配を致しておあり

毎事の對面を居との心安心を為とありき秘の者  
筆及小達とて居る夏由吹く居る仕友小座世む  
口を遠い小由とら大知會の夏とら壁の存習所  
由をまると由然うあいつらが筆先て何々今日を  
送る丈の夏を出来そつかりのどの小春菜小菜成  
賣く歩の心あえまり零落中うかむといのてせん村  
途中て見掛とと然中実不見遠へるやうと  
居由に在てござおまそて私由甘めん若黨存公不中

致一といとぞんとす一とさうあつては中なくそめうちふ  
喰方小團るやうな伏てござおまそとらとら擲なくえ  
る此のうふありま〜〜寔不ちや面目次第のあ  
夏でござおまそて左「あま御余候あいつて由あらう  
か盛りぬうちあぬ夏あう對面を為とらうとら  
獨りの情をその中うみさりの風情をさせん由悉れ  
あの幸は身が方小初つとま根の家城由持紙〜  
何ら夏中人物万ふありと由お殿小門と持とせ娘



由送りきりて主取の出来の進る浪人著しめて由  
細い煙りを立くやうにやう小房で進せよ  
何れろまて何時まで由お供をして由  
子迷幼うとふまふあり子やうら何の及  
此者が老後の所へを日暮つていお供由波とうか今  
のお住居の何処の何より所より一寸書付て進ま  
りのしやかんへいその養を何れ由只今の世に上子  
まをやうてござおまを左何友又そ進が言ひふくの

ご子かん「不工実を私の住居とまうしつていござおません  
とと何れ由左「五丈より高あつても言ひやう  
各かん「不工ままう小高あつても言ひやう  
せんが波分る先づ心易い老の方小居いを波して  
まをせうら左「五丈より高あつても言ひやう  
此波地不案内友とんと左格をまをかん何れ  
いおつうとあまことぬ若でござおまを居いとい會容  
の波でござおまを左「いっさま左格をまをこれ

小尋ねて糸つて對面を絞しての不遠忍ごとまうさ  
まるのつ 左「拵でございあままでせむ方がお出なさいま  
いの以外すお由かゝるま由ございおませうが何とよ由  
松が逆目も尋ねまうしあけまをせうお絞しませう  
まう人懇意の者がいろく怪切お世話をいう其生  
まのでお小あまをせとをうはま取を絞まやうお  
ゆありませううとぞんりまをせう必む添くお案  
下さいませぬやうお頼ひまします 左「あふさぬお  
来ると言入交あらけやう尋ねて性くお及ばぬ  
是も言のどと如女由らうまのけまど由けぬお  
ま收拵も締め居まは言つて表向きその  
姿でござりての世の岐へいを居居後の門由  
まのゆて居らう人の目おまぬやうお分らう  
うやうふして其ひとりのごと言ひあがら懐中よう  
三歩取りいご 左「さう苗もどらううん進せぬが  
いぬく買あまどと絞して拵合せがまくあいつ

まのつ 左「拵でございあままでせむ方がお出なさいま  
いの以外すお由かゝるま由ございおませうが何とよ由  
松が逆目も尋ねまうしあけまをせうお絞しませう  
まう人懇意の者がいろく怪切お世話をいう其生  
まのでお小あまをせとをうはま取を絞まやうお  
ゆありませううとぞんりまをせう必む添くお案  
下さいませぬやうお頼ひまします 左「あふさぬお  
来ると言入交あらけやう尋ねて性くお及ばぬ  
是も言のどと如女由らうまのけまど由けぬお  
ま收拵も締め居まは言つて表向きその  
姿でござりての世の岐へいを居居後の門由  
まのゆて居らう人の目おまぬやうお分らう  
うやうふして其ひとりのごと言ひあがら懐中よう  
三歩取りいご 左「さう苗もどらううん進せぬが  
いぬく買あまどと絞して拵合せがまくあいつ

是と取てきくしもの ん 是の これ 多細ふぞん あつさ 上りまて積 つ 四換 ごま 由まじ えん 何 ふ 令 う 受 あ 記 あ 暇 あ と告 あ 退 あ ぬぞ左内 さ 申 ま 茶店 ちや と立 た 出 で

ツ家 や とさ さ して し 主 しゅ 帰 く けり

正史 せいし 傳 でん いろは いろは 文庫 ぶんこ 卷 まき 之 の 三十二 さんじふに

証 しやう 伝 でん いろは いろは 文庫 ぶんこ 卷 まき 之 の 三十三 さんじふさん

エ 為永春水著

第六十五面

按 あ 員 いん 肚 ぶ の の 状 じやう 主 しゅ とも とも 何 なに 某 かぎ 候 こう の の 以 い 内 ない 人 にん 為 ゐ 時 とき 謙 けん 倉 くら の の 上 かみ 段 だん 小 こ 住 ぢゆう 居 ゐ る る 萩 はぎ 陸 りく 左 さ 内 ない と と 又 また 者 もの あり あり お お 一 いつ 由 ゆ 非 ひ 妻 さい の の 侍 しやく も も 一 いつ 間 かん の の 程 ほど 小 こ あり あり 又 また 相 あひ の の 本 ほん 心 こころ 打 うち 録 ろく めて めて 由 ゆ 心 こころ 不 ふ 掛 か へ へ 変 へん あり あり けん けん 廣 ひろ げ げ 不 ふ 由 ゆ 心 こころ と と ま ま ら ら ぞ ぞ 酒 しゆ 息 いき の の 是 こゝ の の へ へ 病 びやう と と とも とも 人 ひと 女 によ 房 ぼう の の お お 種 ね と と とも とも

娘お冬とらんを連れて史の側へ找と参りまほしき  
昨日燭の音物どのお多とと彦作と参りて春よ  
変を逃て吐きととか言ひあさるうら今日も穉く  
お冬まうしてえんゆい変を言ひあせと吐しと此の  
とふ粉らしくお仕舞あまのまを何ぞ松とゆ小  
張作て悪ひ変てゆあるのういぞんともせんけとどお  
冬よ現在史でえまをといは嫌が氣を操で拍子を  
吐とがらのゆ去程とあめりませんのおまをいまご

何ぞお冬りしをりまお顔付で喘息をりほつてお  
左よさるうら程心掛りてなうませんヨ婿どのおお  
ひあを河と所あえか身なりをうて居まうと大  
之形風情でゆ拍子を知とりのゆとあおまてが  
貴にお遊ひあまのたと死舞でゆお掛あまのつら  
お強ふるまを秘おありまはヨト言ひまて左口  
吐息をほき何ゆ拍子不潔を恨ゆあつて  
ちんまりと扇とくあくつて吐きおゆ吐きおあつてヨ

娘<sup>むすめ</sup>「ヤ<sup>や</sup>史<sup>し</sup>者<sup>もの</sup>やア<sup>あ</sup>他<sup>た</sup>小<sup>こ</sup>女<sup>に</sup>房<sup>むら</sup>で由<sup>よし</sup>持<sup>も</sup>て松<sup>まつ</sup>小<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>雌<sup>め</sup>を<sup>を</sup>養<sup>やしや</sup>

と<sup>と</sup>由<sup>よし</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>久<sup>く</sup>左<sup>ひだり</sup>「女<sup>に</sup>房<sup>むら</sup>で由<sup>よし</sup>持<sup>も</sup>つやう<sup>よう</sup>の<sup>の</sup>

ま<sup>ま</sup>ご<sup>ご</sup>志<sup>し</sup>由<sup>よし</sup>ご<sup>ご</sup>イ<sup>い</sup>ヤ<sup>や</sup>ハ<sup>は</sup>む<sup>む</sup>ど<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>零<sup>おち</sup>落<sup>おれ</sup>中<sup>なか</sup>し<sup>し</sup>心<sup>こころ</sup>「そ<sup>そ</sup>ん<sup>ん</sup>か<sup>か</sup>ら

ま<sup>ま</sup>ご<sup>ご</sup>主<sup>しゅ</sup>取<sup>と</sup>由<sup>よし</sup>為<sup>な</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>浪<sup>なみ</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>指<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>で<sup>で</sup>ご<sup>ご</sup>さ<sup>さ</sup>ぬ

ま<sup>ま</sup>ご<sup>ご</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>子<sup>こ</sup>工<sup>こ</sup>ト<sup>と</sup>言<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>な<sup>な</sup>ご<sup>ご</sup>う<sup>う</sup>同<sup>め</sup>小<sup>こ</sup>涙<sup>なみだ</sup>を<sup>を</sup>溶<sup>と</sup>め<sup>め</sup>る<sup>る</sup>左<sup>ひだり</sup>「イ<sup>い</sup>ヤ<sup>や</sup>

彼<sup>か</sup>令<sup>れい</sup>浪<sup>なみ</sup>人<sup>ひと</sup>で<sup>で</sup>由<sup>よし</sup>梅<sup>うめ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>心<sup>こころ</sup>で<sup>で</sup>さ<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>指<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>が<sup>が</sup>吹<sup>ふ</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>が

け<sup>け</sup>寒<sup>さむ</sup>衣<sup>え</sup>小<sup>こ</sup>荒<sup>あ</sup>布<sup>ふ</sup>を<sup>を</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>中<sup>なか</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>梅<sup>うめ</sup>ツ<sup>つ</sup>切<sup>き</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>を<sup>を</sup>

ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>男<sup>おとこ</sup>も<sup>も</sup>大<sup>おほ</sup>米<sup>こめ</sup>を<sup>を</sup>菜<sup>な</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>賣<sup>う</sup>歩<sup>あひ</sup>行<sup>い</sup>て<sup>て</sup>指<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>を<sup>を</sup>

の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>ん<sup>ん</sup>け<sup>け</sup>と<sup>と</sup>た<sup>た</sup>少<sup>すこ</sup>少<sup>すこ</sup>此<sup>こゝ</sup>身<sup>み</sup>も<sup>も</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>為<sup>な</sup>る<sup>る</sup>が<sup>が</sup>と<sup>と</sup>ん<sup>ん</sup>か

身<sup>み</sup>分<sup>ぶん</sup>不<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>由<sup>よし</sup>腎<sup>じん</sup>不<sup>ふ</sup>遠<sup>とん</sup>ひ<sup>ひ</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>茶<sup>ちや</sup>店<sup>てん</sup>の<sup>の</sup>襪<sup>わ</sup>

へ<sup>へ</sup>吸<sup>す</sup>び<sup>び</sup>世<sup>よ</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>指<sup>さ</sup>を<sup>を</sup>吹<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>が<sup>が</sup>大<sup>おほ</sup>腹<sup>はら</sup>ひ<sup>ひ</sup>で<sup>で</sup>

持<sup>も</sup>て<sup>て</sup>指<sup>さ</sup>と<sup>と</sup>金<sup>かね</sup>も<sup>も</sup>巻<sup>ま</sup>ひ<sup>ひ</sup>果<sup>は</sup>し<sup>し</sup>珍<sup>めづ</sup>方<sup>かた</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>八<sup>や</sup>百<sup>ひゃく</sup>疋<sup>ふた</sup>と<sup>と</sup>述<sup>のたま</sup>

あり<sup>あり</sup>ト<sup>と</sup>ツ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>サ<sup>さ</sup>ト<sup>と</sup>吹<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>お<sup>お</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>

泣<sup>な</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>冬<sup>ふゆ</sup>「史<sup>し</sup>で<sup>で</sup>も<sup>も</sup>唾<sup>つよ</sup>雜<sup>ざ</sup>糞<sup>ふん</sup>を<sup>を</sup>為<sup>な</sup>す<sup>す</sup>「さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>子<sup>こ</sup>工<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>

不<sup>ふ</sup>善<sup>ぜん</sup>し<sup>し</sup>不<sup>ふ</sup>周<sup>しゅう</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>そ<sup>そ</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>者<sup>もの</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>い

で<sup>で</sup>由<sup>よし</sup>他<sup>た</sup>不<sup>ふ</sup>為<sup>な</sup>す<sup>す</sup>中<sup>なか</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>中<sup>なか</sup>う<sup>う</sup>ご<sup>ご</sup>さ<sup>さ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>ん

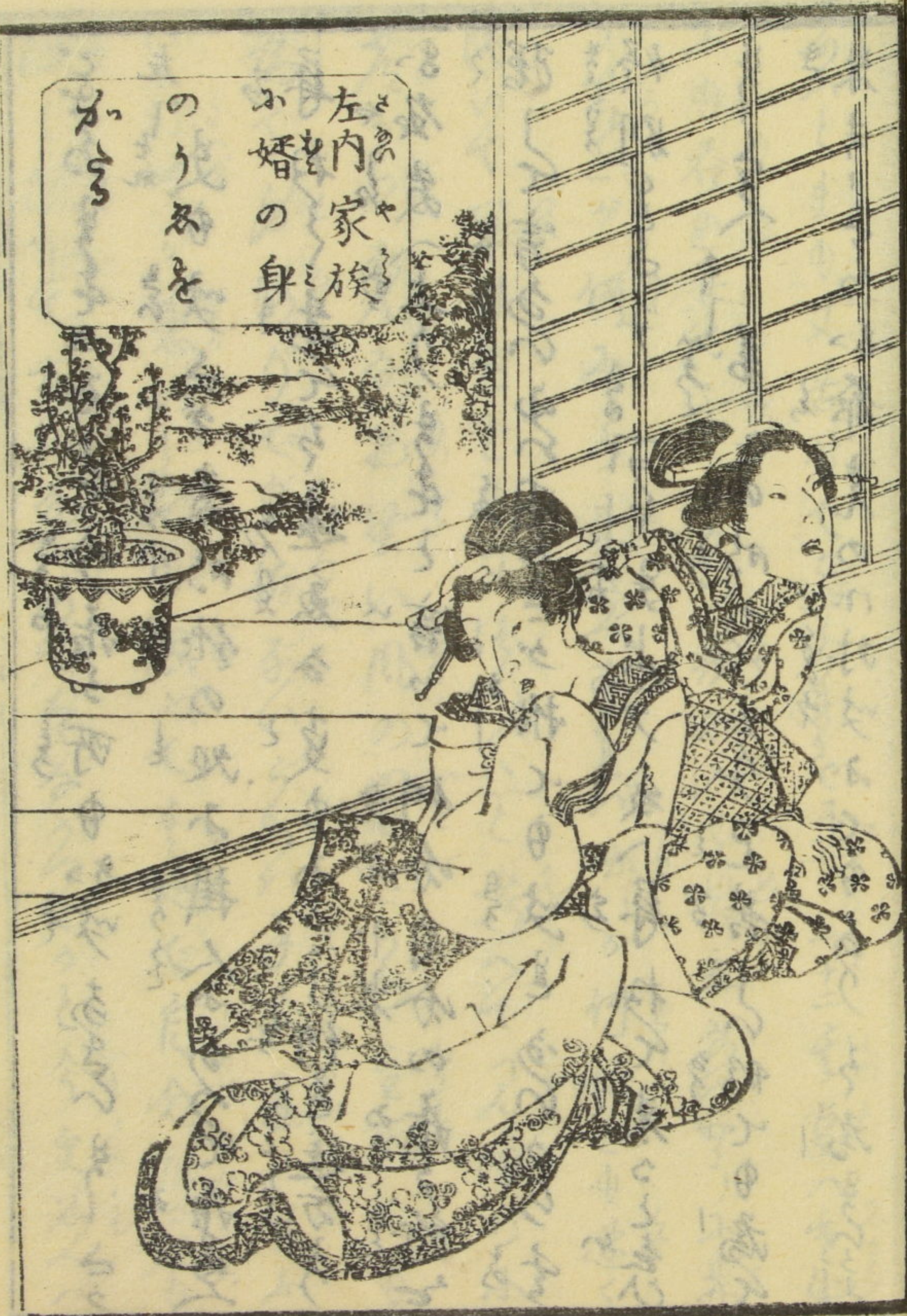
り子正 左「けがれ」由然り 石門とく 何ぞ筆の先で  
喰丈の更も出来とる 相とふと言ひつけ  
も今も変わる 氣来て宜ひるんと 言ひ新を  
つらと元の侍もある 氣のゆるあるまうと  
あつてもうと 史心鏡にまゝ 松をちりあうら 那  
人も何ぞもさる 氣のゆるあるまうと 仁と  
あつてもうと 史心鏡にまゝ 松をちりあうら 那  
男とく 澤倉へ下まは 陸を渡る 知れぬと 及

抱へらまると 信作まゝ 何れと 今時の月より  
振つやうなる者で 由りて 抱へらまると 更なる 社あり  
そうでございませう ぬの成 あんかむのく 一人を誰か  
初行を 出さす ませぬ のう子 夫ふして 由可憐なる  
のいかぬ せと ませぬ たつと 福り 此 女児を 八百  
あんなを せとる 者ふ 連流のせとる 氣を せとる  
涙 せとる 涙して 送る 方々の 離縁を せとる 此と 由  
は 標の年を せとる ぬのく 何れと 及 ぬのく

縁付の方あやが仕しりらいいおおままままててヨヨ ああんんふふおおししわわいいせせくくををんん  
どらう 以もんんくくしし一いっ生せい以い嬢ぢょうがが 苦く勞らうををままささるるををあありりてておおままのの  
まままとといい子こ 左ひだり「いやくやく史しをを考こう究きゅうのの子こ勞らう遠とほいいどど負おぼ女に妻さい史し  
おおままとといいままむむとといいふふ史しをを知しりりにに痔ぢををどどららいい 假かり令りょうのの  
中なかりりふふ零ぜろ為なりりとと由よし史しららそそのの者もののの運うん不ふ運えんてて是ぜ非ひ  
ゆゆああのの史しとと今いま先まづららのの離り縁えんをを為なすすとと言いひひくく  
來きててゆゆいい分ぶんをを兼あ知ちをを為なすすああのの積つりりどどののをを送おくるる  
ううららんんをを史しををままひひ病びょうををままししつつららひひゆゆちちをを考こうららるるいい

史しとと婚こんとといいふふ由よし同どう指さしどどららのの傍そばふふ足あし捨すててをを  
ままままとといいぬぬ夜よ表ひょうふふ白しろ板ばんのの口くちゆゆああららいい浪なみ人ひとおおおおららるる  
家いへででゆゆおおししせせてて細こいい煙えん草そうゆゆままのの位ゐちちをを史しをを為なすす  
ままままとといいふふとといい思おもつつととううらら 今いま史しをを考こう究きゅうししてて後ありりゆゆちちをを考こうららるる  
ののどどききヨヨ 一いっままままとといいふふ由よし松まつととつつてて後ありりゆゆちちをを考こうららるる  
史し婚こん中ちゆうをを引ひ裂さくく史しをを考こう究きゅうししてて後ありりゆゆちちをを考こうららるる  
跡あとととどどんんとといいふふ今いまのの中なかりりゆゆちちをを考こうららるる  
史し婚こん中ちゆうをを引ひ裂さくく史しをを考こう究きゅうししてて後ありりゆゆちちをを考こうららるる  
史し婚こん中ちゆうをを引ひ裂さくく史しをを考こう究きゅうししてて後ありりゆゆちちをを考こうららるる

左内家族  
の婚の身  
のりぬを  
かき





どおのまをヨセし今居る所にお嘆あきいし  
左「それ」ま 多トシ 地お掛人おあつて居る  
史中嘆か 交時地の地お掛人おあつて居る  
尋ねて来ても遠慮を史中あつて何處迄方より  
お後後へ上りまをと言つて何れ自分の居る所を  
隠して言ふ所の困つたが推して史中あつて居る  
何れ「ま」ま 可ト史中「ま」後へ尋ねて来るとい  
し「ま」ま 第一その時史中「ま」形でも為ん  
来ま「ま」お爺えの以外史中「ま」ありま為んといふと

あつて史中「ま」又苦勞で「ま」あつて居る  
お由春也せて「ま」ま くら後お入て同主あつて来  
う「ま」ま 何れ「ま」来ま「ま」ま 何れ「ま」ま 速く  
ほつて宜けまとも又「ま」ま 考つて「ま」ま 史中「ま」  
ま くらあつてお掛い風の男ま くらま くらま くらま  
為て「ま」ま 形りでも「ま」ま くらま くらま くらま  
の史中「ま」ま 悪い「ま」ま 史中「ま」ま 史中「ま」ま 史中「ま」ま  
深く「ま」ま 言ひあつて「ま」ま 今史中「ま」ま

那<sup>あ</sup>と死<sup>し</sup>推<sup>お</sup>て由<sup>ゆ</sup>形<sup>か</sup>多<sup>た</sup>所<sup>しよ</sup>を岐<sup>ま</sup>て垂<sup>あ</sup>下<sup>げ</sup>官<sup>くわん</sup>う所<sup>しよ</sup>と不<sup>ふ</sup>残<sup>ざん</sup>念<sup>ねん</sup>  
及<sup>及</sup>変<sup>へん</sup>を為<sup>な</sup>とと替<sup>か</sup>く必<sup>ひ</sup>案<sup>あん</sup>をそ<sup>そ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>何<sup>なに</sup>と  
あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>よ<sup>よ</sup>お<sup>お</sup>は<sup>は</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>七<sup>しち</sup>考<sup>こう</sup>へ<sup>へ</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>居<sup>い</sup>る<sup>る</sup>假<sup>か</sup>令<sup>れい</sup>  
あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>男<sup>おとこ</sup>か<sup>か</sup>来<sup>き</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>近<sup>ちか</sup>が<sup>が</sup>手<sup>て</sup>紙<sup>し</sup>を<sup>を</sup>よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>う<sup>う</sup>  
何<sup>なに</sup>う<sup>う</sup>二<sup>に</sup>三<sup>さん</sup>日<sup>にち</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>及<sup>及</sup>指<sup>さし</sup>子<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>細<sup>こま</sup>き<sup>き</sup>と<sup>と</sup>ん<sup>ん</sup>  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>深<sup>ふか</sup>く<sup>く</sup>案<sup>あん</sup>ト<sup>と</sup>変<sup>へん</sup>由<sup>ゆ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ハ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ト<sup>ト</sup>言<sup>い</sup>れ<sup>れ</sup>  
て<sup>て</sup>女<sup>め</sup>恩<sup>おん</sup>の<sup>の</sup>女<sup>め</sup>房<sup>ぼう</sup>由<sup>ゆ</sup>心<sup>こころ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>細<sup>こま</sup>き<sup>き</sup>と<sup>と</sup>珍<sup>めづ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>是<sup>これ</sup>より<sup>より</sup>日<sup>ひ</sup>  
毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>寒<sup>さむ</sup>肌<sup>み</sup>が<sup>が</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>吉<sup>きち</sup>候<sup>こう</sup>を<sup>を</sup>待<sup>まち</sup>つ<sup>つ</sup>細<sup>こま</sup>小<sup>こ</sup>日<sup>にち</sup>立<sup>た</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>紋<sup>もん</sup>

耳<sup>みみ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>る<sup>る</sup>余<sup>あま</sup>りの<sup>の</sup>夏<sup>なつ</sup>不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>ひ<sup>ひ</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>左<sup>ひだり</sup>門<sup>かど</sup>を<sup>を</sup>書<sup>か</sup>と<sup>と</sup>娘<sup>むすめ</sup>  
不<sup>ふ</sup>對<sup>たい</sup>ひ<sup>ひ</sup>一<sup>いっ</sup>逆<sup>さか</sup>日<sup>にち</sup>上<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>え<sup>え</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>指<sup>さし</sup>別<sup>わか</sup>日<sup>にち</sup>乃<sup>のち</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あ<sup>あ</sup>  
け<sup>け</sup>是<sup>こゝろ</sup>と<sup>と</sup>由<sup>ゆ</sup>兼<sup>かね</sup>一<sup>いっ</sup>自<sup>みづか</sup>分<sup>ぶん</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>不<sup>ふ</sup>知<sup>ち</sup>て<sup>て</sup>来<sup>き</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>や<sup>や</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>夏<sup>なつ</sup>と<sup>と</sup>  
り<sup>り</sup>逆<sup>さか</sup>倚<sup>よ</sup>て<sup>て</sup>由<sup>ゆ</sup>陰<sup>かげ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>候<sup>こう</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>内<sup>うち</sup>で<sup>で</sup>お<sup>お</sup>を<sup>を</sup>思<sup>し</sup>ひ<sup>ひ</sup>より<sup>より</sup>今<sup>いま</sup>  
ハ<sup>ハ</sup>折<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>夏<sup>なつ</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>にち</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>出<sup>で</sup>掛<sup>か</sup>て<sup>て</sup>尋<sup>たず</sup>ね<sup>ね</sup>と<sup>と</sup>  
何<sup>なに</sup>程<sup>ほど</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>一<sup>いっ</sup>史<sup>し</sup>で<sup>で</sup>由<sup>ゆ</sup>兼<sup>かね</sup>公<sup>こう</sup>居<sup>い</sup>処<sup>ところ</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>初<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>  
て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>書<sup>か</sup>を<sup>を</sup>は<sup>は</sup>う<sup>う</sup>む<sup>む</sup>す<sup>す</sup>う<sup>う</sup>を<sup>を</sup>尋<sup>たず</sup>ね<sup>ね</sup>て<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>左<sup>ひだり</sup>  
何<sup>なに</sup>で<sup>で</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>べ<sup>べ</sup>る<sup>る</sup>處<sup>ところ</sup>と<sup>と</sup>所<sup>ところ</sup>ら<sup>ら</sup>そ<sup>そ</sup>ん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>不<sup>ふ</sup>意<sup>い</sup>の<sup>の</sup>処<sup>ところ</sup>不<sup>ふ</sup>意<sup>い</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>

由思おもひはああの揚あがりふどつとら 郡あき近きん所しよへ性せいツて 岐き舎しゃせ  
とら 大だい新しん 手て掛かりと 岐き出しゅさああの 支しち ちちととああの 岐き舎しゃ  
くらまア ちちどと 為なく 出で掛かく 足あし分ぶんうヨ 更さらどと 寔まじふ  
以い昔こころ 勞らうささななて 心こころ 由よし 心こころ 由よし 不ふ由よし あり  
由よし 心こころ 由よし 不ふ由よし あり 手て工こうか 母はは 公こう 公こう 公こう  
致せいううサ せん ありまアか 出でああの 岐き舎しゃトとままり ちちト  
言いふ 不ふ左さ 目めハ 鼻はな 頸けいて 仕し 交かる せん 岐き舎しゃ へ 弟あに 履り 取と  
の 仲なつ 間ま々 あり 岐き舎しゃ 不ふ 履り 後ご 不ふ 来きり 仲なつ 間ま 止と 郡あき さま

八百やち屋やさんさんが 来きりままと 左さ 郡あき 近きん 所しよ へ 性せい ツて 岐き 舎しゃ せ  
ううと 言いつて 岐き 舎しゃ 不ふ 由よし 心こころ 由よし 不ふ 由よし あり 手て 工こう 母はは 公こう 公こう 公こう  
ありまアか 出でああの 岐き 舎しゃ トと ままり ちちト 言いふ 不ふ 左さ 目め ハ 鼻はな 頸けい て 仕し 交か る せん 岐き 舎しゃ へ 弟あに 履り 取と  
の 仲なつ 間ま 々 あり 岐き 舎しゃ 不ふ 履り 後ご 不ふ 来き り 仲なつ 間ま 止と 郡あき さま  
ああの 岐き 舎しゃ 不ふ 由よし 心こころ 由よし 不ふ 由よし あり 手て 工こう 母はは 公こう 公こう 公こう  
ありまアか 出でああの 岐き 舎しゃ トと ままり ちちト 言いふ 不ふ 左さ 目め ハ 鼻はな 頸けい て 仕し 交か る せん 岐き 舎しゃ へ 弟あに 履り 取と  
の 仲なつ 間ま 々 あり 岐き 舎しゃ 不ふ 履り 後ご 不ふ 来き り 仲なつ 間ま 止と 郡あき さま  
ああの 岐き 舎しゃ 不ふ 由よし 心こころ 由よし 不ふ 由よし あり 手て 工こう 母はは 公こう 公こう 公こう  
ありまアか 出でああの 岐き 舎しゃ トと ままり ちちト 言いふ 不ふ 左さ 目め ハ 鼻はな 頸けい て 仕し 交か る せん 岐き 舎しゃ へ 弟あに 履り 取と  
の 仲なつ 間ま 々 あり 岐き 舎しゃ 不ふ 履り 後ご 不ふ 来き り 仲なつ 間ま 止と 郡あき さま

東のつ 仲 一五 証言 大風 不出 掛て 糸り あり  
一ヤヤ 果まき 物ど 定め 一荒布の中 つかう つかうの  
形りと 爲て 見よ 七あつうを 仲 一五く 大遠ひて ごと  
おまふ 只今 お玄 関ら 物中と 云ふ 夢か 致し あり  
さうら びて 見ます と 主 流を お 坊が 供と 一 個 連に  
拙者 一 着村 寄 物と まう 今 考ふ 左内 居 在 者  
あら お同 小掛り 云と 申し ます うら ひと ひと  
作向て 顔と 見ます と 以 男の 大末 終 業て ごと

おまふ 一こので 宛お 怖り 致し あり  
か 姓ね 人 以 度が 以 間 別 とも した 金と 二 歩 考ふ あり  
お 考ふ あり 一 考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり  
男 形りの ぬま の 管が あり が 一 丈を 人 遠 づい あり  
つう 仲 一 人 遠 びう 何れ 考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり  
其の 考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり  
手札と 考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり  
考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり  
考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり 考ふ あり

あるもの衣式後の味、おまを返をまるとあり申あり申  
さうらえんか僥倖でもあつたこの何れもさう遠くは  
分さ度ごう先く容間へ樂間をまると宜ひと云われん  
併の伸るの又云實へと急さ口く

第六十六回

おまを返の味、おまを返をまるとあり申あり申  
さうらえんか僥倖でもあつたこの何れもさう遠くは  
分さ度ごう先く容間へ樂間をまると宜ひと云われん  
併の伸るの又云實へと急さ口く

おまを返の味、おまを返をまるとあり申あり申  
さうらえんか僥倖でもあつたこの何れもさう遠くは  
分さ度ごう先く容間へ樂間をまると宜ひと云われん  
併の伸るの又云實へと急さ口く

恠て左月の袴と身おつけ履力一本掛て客間の裡  
ふりうへてるふいろお替のき物が大束冬菜と  
着ッて居とろく為さる染ふ引替之羽織小  
兼宇の袴腰の木の指へまぐ一寸りて由連うち  
知まぬ出来合のふあうざまの何指してえん工  
面としくと柄りあざう由立流を打扮お自と  
辭申あうとまりて 左 是のくき物と宜ことそ  
お尋ね申まると実を遠方でもい男とそめ書

由女児申今日の本らまるう壁ハリてらるう  
目お噂をうりしと柄て居まると 左 一丈とちや忍入  
まうと養てござお申す先双替と柄お掛あとい  
まへては仕儀の如指子何より大慶小ぞんぞん  
扱先日途中でぬとお目小致りまうて  
の程は細切お作申さいますのまらふ金  
まへおあうふ飲りまうて有難い仕合せお返  
上まうと子連れお申お袴かさぐ上り申すお書

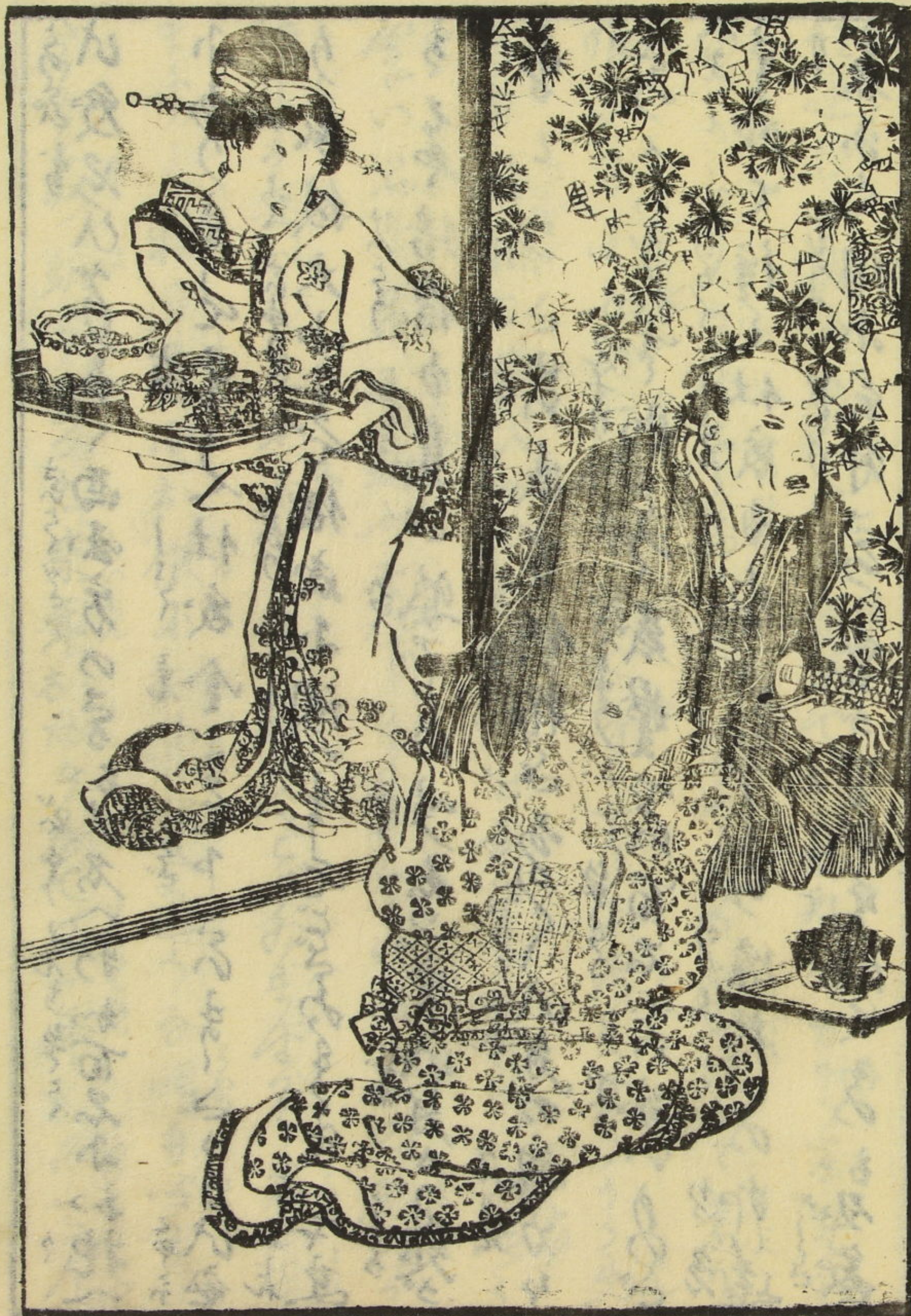
ごおまき分種々分の夏お持まて自引のり  
ごますす夏がごおまきさうぞんりあざうたさふ  
此云法と致しませ左アハく定め何うせんを  
決てもあらううとあつて存しとてまひあがう後  
ろとええう左お種や女児と連を速く来るあいう  
すお茶とおしらくて存る。宜しいサ他のお客でん  
あゝ素花の四つりとして由まア古花でもお茶と  
持って来て速く致とええうりせえうりまか何

よりの此種をどくくといふふうちお種お冬中出  
さるまの換抄あり別にお冬を久しうり  
史お對面する夏田名種り吐し由笑さかえん  
かあ親の存おといひ親も史中お笑さる  
質とるん知る存お例へさありうち解さつ  
お種りさんをも急しん種むらお不安言と官ふ  
あど此さ名味ある種らあ筆お由多く速く  
よゝ又書おりておまげとてあざうく笑くあつたあま

史第の爰おなぶして言のむ看友宜しく素一し  
はらちおか種ハ猪手あて用言せし酒肴とておれ小  
運をせその角中持て進々お後爰お出せが左門々  
盃と取あげて空物おまわら後お密由主中香心  
は史さうのさまの酒盛お後中かのづうあうけ  
ば左門のいとも笑し氣お左邂逅のお密お何由の猪手  
さあのが何年今日ハ四つとあて其ひさの史さう  
と空物との買を更味てすうが先日まおれお盛つて

史第の爰おなぶして言のむ看友宜しく素一し  
はらちおか種ハ猪手あて用言せし酒肴とておれ小  
運をせその角中持て進々お後爰お出せが左門々  
盃と取あげて空物おまわら後お密由主中香心  
は史さうのさまの酒盛お後中かのづうあうけ  
ば左門のいとも笑し氣お左邂逅のお密お何由の猪手  
さあのが何年今日ハ四つとあて其ひさの史さう  
と空物との買を更味てすうが先日まおれお盛つて





以後必ひがけなく西雲方のさか大倉へ移りお百石お抱へ  
ふあり申して重之仕度金まて下さるまゝころりい  
り衣被大小まて飯成お潤へ申してござあまら  
ちちや結構を度ご整アどの味もつさけ身が又整  
あしとまつこのり度ご何指ごあしくけ身の服力  
さうらうり重物どの裁量でい百石でい安いのど  
重成で種々仕度申あさころりくら燈籠その御遠  
直かく娘お云付さるし言か宜い重成であま及度

後述お申すおありさう定めてお長登せ申下さるさ  
あるさうさうり重物どの裁量でい百石でい安いのど  
娘お申す小女の一個申付てあさころりお為年せうさ  
等申都合の宜いさうおお積とあさころり宜いかん  
厚いお名し召あ結おぞんども申さるし必発の殿様  
迎へお申へお申お承申さるさうござあまら  
申すお私申すお承お承お連あさころりみ鳴申す  
さうさあ知らるると来年お成り申す又一年お成り

ぬあぐらお摺ひまうす夏ふありますうの中知まはせん  
左「とらふ」あう一年か三年の中運方の構うあいつ  
後地か出来さうえで一刻の中迷くかたの中りあふ  
安んがふは伏ごまお務て中かたの中久しうりの夏  
ごうごう角の中今夜の運方へ宿めてゆらん何あ  
お後とあふか宜うらう夏へいひお後ごまお身かめ物  
殿へへいめは目見と作付られますので今晚は  
此世作と致し七具ます人の玉も七集りませむあう

ま其ららりび目首尾よく月かお後ましと  
うの晩又おましては元ぬかうります七ぶさ  
ませう「あふさ夏然ういふ伏あう」云理お由止られ  
あのか併目一あいの夏七吐し七性少ても宜うらう  
い、五日纏うの所か中どごあまはし「後先心中せ  
ますうまがうあうお暇お致し「ませう」存あら元種  
と此能まふありまへは夏小ごまおまうこと云ひ  
懐う「家の振ゆお色し」おとあうり物

おき<sup>おき</sup>是<sup>これ</sup>を<sup>事</sup>聖<sup>せい</sup>の<sup>光</sup>既<sup>く</sup>来<sup>く</sup>り<sup>も</sup>心<sup>こころ</sup>おぬ<sup>ぬ</sup>し<sup>お</sup>新<sup>あらた</sup>け<sup>け</sup>て<sup>さ</sup>盡<sup>お</sup>く  
う<sup>う</sup>仕<sup>し</sup>拜<sup>まが</sup>て<sup>あ</sup>盡<sup>お</sup>て<sup>え</sup>異<sup>ちが</sup>ふ<sup>ちが</sup>ふ<sup>ちが</sup>ハ<sup>ハ</sup>イ<sup>イ</sup>史<sup>し</sup>者<sup>しや</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>ハ<sup>ハ</sup>既<sup>く</sup>の<sup>ち</sup>意<sup>い</sup>  
お<sup>お</sup>出<sup>で</sup>る<sup>で</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>入<sup>い</sup>下<sup>げ</sup>小<sup>こ</sup>聲<sup>こゑ</sup>に<sup>い</sup>云<sup>い</sup>へ<sup>え</sup>を<sup>を</sup>領<sup>りやう</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>里<sup>り</sup>  
左<sup>さ</sup>月<sup>げつ</sup>史<sup>し</sup>輝<sup>き</sup>小<sup>こ</sup>別<sup>べつ</sup>是<sup>し</sup>と<sup>と</sup>告<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>金<sup>かね</sup>実<sup>じつ</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>出<sup>で</sup>る<sup>で</sup>時<sup>とき</sup>  
と<sup>と</sup>是<sup>こゝ</sup>の<sup>こゝ</sup>ど<sup>ど</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>□<sup>か</sup>羅<sup>ら</sup>十<sup>じゅう</sup>六<sup>ろく</sup>年<sup>ねん</sup>の<sup>の</sup>十<sup>じゅう</sup>二<sup>に</sup>月<sup>げつ</sup>十<sup>じゅう</sup>四<sup>し</sup>日<sup>にち</sup>  
今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>七<sup>しち</sup>君<sup>きみ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>ん<sup>ん</sup>為<sup>な</sup>ふ<sup>ふ</sup>大<sup>だい</sup>星<sup>せい</sup>由<sup>ゆ</sup>良<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>女<sup>め</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>ぬ  
比<sup>ひ</sup>十<sup>じゅう</sup>勝<sup>しょう</sup>人<sup>にん</sup>多<sup>た</sup>の<sup>の</sup>隙<sup>ひま</sup>小<sup>こ</sup>礼<sup>らい</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>然<sup>しか</sup>と<sup>と</sup>報<sup>あや</sup>り<sup>り</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>盟<sup>めい</sup>約<sup>やく</sup>せ<sup>せ</sup>り  
心<sup>こころ</sup>の<sup>の</sup>余<sup>あま</sup>あ<sup>あ</sup>ざ<sup>ざ</sup>う<sup>う</sup>金<sup>かね</sup>狭<sup>さ</sup>小<sup>こ</sup>異<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>く<sup>く</sup>由<sup>ゆ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>結<sup>むす</sup>む<sup>む</sup>中<sup>ちゆう</sup>流<sup>りゅう</sup>石<sup>せき</sup>若<sup>わ</sup>

木<sup>き</sup>小<sup>こ</sup>市<sup>し</sup>あ<sup>あ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>る<sup>る</sup>是<sup>こゝ</sup>今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>限<sup>かぎ</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>名<sup>な</sup>跡<sup>あと</sup>ど<sup>ど</sup>と<sup>と</sup>名<sup>な</sup>が<sup>が</sup>物<sup>もの</sup>中<sup>ちゆう</sup>縁<sup>えん</sup>  
裂<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>ち<sup>ち</sup>う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>史<sup>し</sup>と<sup>と</sup>辨<sup>べん</sup>小<sup>こ</sup>出<sup>で</sup>さ<sup>さ</sup>子<sup>こ</sup>ど<sup>ど</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>裡<sup>うち</sup>小<sup>こ</sup>唯<sup>ただ</sup>も<sup>も</sup>流<sup>なが</sup>る<sup>る</sup>  
去<sup>き</sup>て<sup>て</sup>出<sup>で</sup>仕<sup>し</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>辨<sup>べん</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>身<sup>み</sup>の<sup>の</sup>左<sup>さ</sup>内<sup>ない</sup>史<sup>し</sup>輝<sup>き</sup>由<sup>ゆ</sup>お<sup>お</sup>老<sup>らう</sup>中<sup>ちゆう</sup>七<sup>しち</sup>  
れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>悟<sup>ご</sup>ら<sup>ら</sup>子<sup>こ</sup>ど<sup>ど</sup>わ<sup>わ</sup>が<sup>が</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>何<sup>なに</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>表<sup>あらわ</sup>す<sup>す</sup>を<sup>を</sup>今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>小<sup>こ</sup>  
別<sup>べつ</sup>是<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>情<sup>なさけ</sup>も<sup>も</sup>是<sup>こゝ</sup>と<sup>と</sup>情<sup>なさけ</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>心<sup>こころ</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>出<sup>で</sup>る<sup>で</sup>今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>中<sup>ちゆう</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>にち</sup>  
今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>が<sup>が</sup>新<sup>あらた</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>送<sup>おく</sup>り<sup>り</sup>ける<sup>る</sup>  
是<sup>こゝ</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>お<sup>お</sup>老<sup>らう</sup>が<sup>が</sup>新<sup>あらた</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>一<sup>いち</sup>振<sup>び</sup>込<sup>こ</sup>色<sup>いろ</sup>を<sup>を</sup>解<sup>と</sup>け<sup>け</sup>小<sup>こ</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>  
ち<sup>ち</sup>ど<sup>ど</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>が<sup>が</sup>本<sup>ほん</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>一<sup>いち</sup>段<sup>だん</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>程<sup>ほど</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>か<sup>か</sup>

之の物語りあざをぶ十二編の巻首へん不綴りちよめ續つぎ  
 自餘トよの武士ざし第ちの巻表いふく情じやう合あ添そくき  
 ありせ節せつありち実傳じつでんをか花はな字じふふ筆ひつとそ加かええ  
ひき引ひきははぎぎ此こ板いたありあ是こ一いち

正史  
 実傳  
 いろは支庫卷之三十三

